



新宿発
330号

東日本大震災に想う II

—— 原発は いらない ——





330号 東日本大震災に想うⅡ 目次

表紙 6・11脱原発デモ

巻頭言 深い沈黙の悲しみのなかで……………斎藤 千代 1

津波・戦争・故郷……………中村 道子 2

避難所の裏側……………松尾 俱子 5

被災地でボランティアをして……………宮本久美子 12

玄海原発を止めたい……………末永 節子 22

こんな大事な時だからこそ、是々非々で事態を見抜く力を！……………小川みさ子 30

被ばく労働者を踏み台にした〈命の規制緩和〉は許せない！……………小川みさ子 33

児玉龍彦東大教授、国会で、政府の放射線対策を批判「満身の怒り」を表明……………厚生労働委員会議事録 41

ふくしま集団疎開裁判……………厚生労働委員会議事録 52

被曝対策が不十分である これだけの理由……………竹野内真理 56

進行する首都圏の放射能汚染とその影響……………日置 雅晴 65

詩 いのち……………堀場 清子 74

新潟から 平成23年8月9日 柏崎市民である私……………押見 操子 78

沖縄から 空と大地を取り戻すまで……………浦島 悦子 84

福島県男女共生センター「女と男の未来館」を訪ねて……………斎藤 千代・三船 照子 89

あいらのあいら……………斎藤 千代・三船 照子 99

深い沈黙の悲しみのなかで

斎藤 千代

二〇一一年八月、被災の町、仙台で新幹線を降り、「津波の現地」に向かった。震災後、五か月を経た仙台市は、一見、無傷に見えたが、路傍の草木は無残に折れ、頭を垂れているものも多かった。

そして、たどりついた、津波被害が甚大と報道された石巻港は、すでに、主な被害物は取り払われ、海は限りなく静かに見えた。予期していた悪臭もなく、修理を待つ貨物船がただ一隻、岸近くに浮かんでいた。

しかし、海岸を離れ山に近づくと、傾斜地にある無数の墓石が、傾き、倒れ、巨大な地震が墓石をもてあそんだ跡を、まざまざと示していた。轟音と悲鳴が、耳の奥で鳴った。

浜には一羽の鳥の姿も見えず、一人の人影も無く、静けさが、通り過ぎた波の凶暴な激しさを如実に映し出していた。

一方、直接、海の圧力に屈伏したわけではない杜の都、仙台市中心部は、お盆の人の行き交うにぎわいの中にあり、東北随一の都市らしい行儀の良さが、人びとの心の奥底に眠る深い悲しみを、静かに物語っていた。

西の人びとに比べれば、口下手で、口数も少ない東北の人びとは、今度の大水害も、大地震も、今は進んで伝えようとは、していない。その深い心の底に、「もしかすると防ぎ得たかもしれない災難」に対する形容しがたい自責と悲しみが、重く大きく居座っているのではないか。

三陸の大津波の経験は、リアス式海岸一带に、繰り返し語り継がれていたはずだ。テレビで観、新聞や週刊誌を貪り読み、私たちは知らず知らず「知ったつもり」になっている。人ひとりいない海辺を黙って歩き続けながら、その思い込みの傲慢さに、「私たちは、もしかすると、再びこの惨禍を経験するのでは……」と、噴き上げる怖れに、おののいた。

津波・戦争・故郷

中村道子

一九四五年の夏。疎開先の長野県から東京へ一次帰省した私が見た東京。駅のプラットホームは、まるで見晴らし台、はるか彼方まで一望の焼け野原だった。杳然と立ちすくむばかりの、あの衝撃的な景色と、写真で見た津波被災地のありさまは、同じだった。

一瞬にして、何も彼も、命までも奪われることが起こるなど、常日頃想像して暮らすことはできない。でもそうしたことは、今まで、いろいろな場所で幾度かあったことを思い出す。

私の両親は、一九二三年の関東大震災で、家財のすべてと大切な家族を失っている。

「太平洋戦争中の激しい空爆の中で、命だけは全うすることができたのは、関東大震災の経験からであり、また、その後の立ち直りについても、当時の思いが役立ち、助けになった」と、よく語っていた。

戦火の中を逃げまどったあの思いと、この度の津波の恐ろしさは、似ている。大切な人、物を失った悲しみも、同様であったことと思う。

戦中は、沢山の焼死者の遺体を、大谷石の塀際に積み重ねて、茶毘に伏した。家族の亡骸を焼け跡の風呂の中で焼いた人もあった。

「身許のわからず仕舞の遺体」は、石油などは、手に入らぬ戦中のことで、トラックに山積

みにして何処とも知れぬ所に埋葬したという。未だにその場所を探し求めている遺族も多い。津波で未だに行方のわからぬ多くの方がいて、もはや、探しようもない御家族のあること。家族を喪つて一人きりになった幼い人。家を流され、見知らぬ土地に暮らすことになった人。様々な苦しみや悲しみが、未だに続いていることを思うと、胸が痛む。

戦争中、十代を過ごした私は、住む家を失った上、空襲に明け暮れる東京を後にして、知らぬ土地で勤労働員の日々を送った。幼い弟は、強制の学童疎開で、家族から引き離され、これも知らぬ土地で集団生活を送った。あまつさえ、一九四五年春、静岡県を襲った遠州灘大地震に遭い、同じ疎開児童七人が圧死したという惨事を体験した。

なんと、この度の災害が戦禍と似ていることか。この、平和に、幸せに暮らす人びとの上に、その土地に、この様な事が起こるのは、これもまた、「何かの戦争」なのだろうか。

自然の驚異的な災害、戦争中の市民虐殺空爆など、幾度も業火にさらされても、それを生き延びれば、人びとは笑いや、楽しみを取り戻し、さらに他者へのやさしさを増して、再び幸せに生活する力を持っていることを、私は見てきた。

関東大震災で大打撃を受けた私の母は、その後、漸く再び築き上げた家が、まるごと焼け失せたとき、「心の問題は別として、関東大震災の時、焼けた人と焼けなかった人の表面的な差は、三年ほどで全くわからなくなった。また、やり直しましょう」と言ったのを覚えている。

そして、私たちは、焼け跡に、僅かな、かき集めた材料を使って、自力で掘立小屋を造って、半年余をそこで過ごした。

井戸の水が使えたのだけが幸せで、電気はない。ローソクやマッチも入手困難であつたばかりか、何とか手に入れた食材を煮炊きするための薪になるものが焼け野原にはなかった。どうやって生きのびていたのか、覚えていない。

掘立小屋なので、寝ていると、すき間からお月様が見える。寒い風も入って来る。

こんな戦後のことを思い出していると、避難所や仮設住宅に暮らす方がたの御苦労が案じられる。

私にとっては、東京の原宿が生まれ育つた故郷だ。昭和十五年に開催が決まっていた、遂に実施されなかった幻のオリンピックピックのために作られた美しい道に面した石垣の上に、家があつた。思い出すたびに泪ぐむほど、なつかしい我が家は、一九四五年の五月、激しい山の手大空襲で、この辺一帯が火の海になり、私の家の入り口で九人、その下の道路で五百人余の人びとが黒焦げになって亡くなった。私の家族は、ここで楽しい暮らしを再興することができず、この地を去つた。故郷を捨ててしまった。

故郷を離れる。捨てる。今、原発の混乱のさ中にいる人びとは、果たして再び故郷での楽しい暮らしが取り戻せるのだろうか。

絶望的な戦況の中で、強いて希望を作り出そうとしていた、末期の太平洋戦争に似た苦しさを感じている。何か大きな力が働いて、本当の希望が輝くことを祈るばかりだ。

故郷は、人にとって永遠の宝なのだから。そして国土そのものこそ、私たちの大きな、故郷なのだから。

避難所の裏側

松尾 俱子

「家が地震にも津波にもあつていない。ただ福島第一原発の危険区域ギリギリで、避難してきた。身の回りの物も取りに帰れない。食糧は、菓子パンとおにぎり。子どもを外で遊ばせることもできない。親も子どもも限界です。」

「老人二人抱えて病院に行くのも、ままならない。何を基準にして危険区域としているのか。シーベルトの数値も、説明の担当者によってバラバラ。想定外だったですまされることではない。」

「『お風呂にゆっくり入りたい』——私が持参したタオル帽子。髪を洗ってかぶるのに大好評。5回目訪問で221個。もともとは、抗がん剤で抜けた髪の、夏のカツラ用に、岩手県のがん患者さんが考案されたもの。たくさんの方のご協力でできた帽子です。」

「本を見つけて切り絵に挑戦しています。狭いスペースで何か月も生活していると、一瞬、気が狂いそうになる。突然、野菜作り禁止。これで食べていったのに、お先真っ暗。早く当たり前の普通の生活を返して！」

「20頭の牛を飼っていた。山ほどワラのエサを置いてきたけれど、ワラも草も被曝限度オーバーで、牛は国が処分する。『子牛から育てて、やっとこれから』という時、あまりにもむごいと思いませんか。」

「やっと念願の仮設住宅に入居できたが、食糧・生活物資、すべて自分で調達。食糧は避難所まで取りに行かなければダメ。車もない遠い場所で、やむなくリターンしてきた。」

「31歳になる若い母親。両親、ご主人が、津波に流され、5か月の乳児をかかえ、ひとりで頑張っている。胸がパンパンに張って苦しんでいた。私の自己流で、蒸しタオルでの、母乳にたまっている分を出す療法が、てきめん。見える病人の医療チームだけでなく、ちよつと見えない所で苦しんでいる人が居ることも視界に入れていただきたい。」

以上は避難所（福島市あづま総合体育館）を訪ねた時、話していただいた声の一部です。

想像を絶するような東日本を襲った未曾有の大震災から、はや5か月が経ちました。一瞬にして15,696人という尊い命が奪われ、未だに行方不明の方が4,666人。さらに身ひとつで避難所生活を強いられている方、また、九死に一生を得、入院治療の方がた、お一人おひとりに、あらためて、心よりお見舞い申し上げます。

私は福岡市に住んでいます、NPO法人〈がんを学ぶ青葉の会〉代表の松尾と申します。

51歳の時、スキルス性の胃がんで浸潤が早く、「あと5か月」との厳しい告知を受け、「生きたい」という思いだけで、気がついたら、今年で15年目を迎えました。現在、がん患者の方と、その家族、また『青葉通信』読者の方を含め、200名のメンバーで、「がんを克服された方が、今、闘っている方をサポートしていく仲間づくりの会」として立ち上げ、8年目になります。会の標語、最後まで、「あわてない、あせらない、あきらめない」をモットーに頑張っています。

3月11日の大震災は、地震、津波、刻一刻と迫る福島原子力発電所の放射能汚染の、新聞、テレビのニュースを耳に、目にしながら、頭の中は、「避難所に行こう」と決めていました。「自分の目と足で確かめたい」というのが本心でした。

もともと私は宮城県仙台市生まれで、津波の犠牲者が一番多かった仙台市若林区には、長兄が住んでいました。今回の津波で、長兄、親族の家四軒が流され、それぞれ避難所生活が続き、最後まで姪の行方が判らずで、(当時は連絡の手段がなかった)心配しましたが、無事であったこと。また甥が、「がれきに流されながら、一本の木によじ登って、ヘリコプターで救助され、命はとりとめた。」との話を、当時を振り返りながら、兄から聞くことができました。

私の身内はそれぞれ新しい場所に落ち着き、「全員無事」との確認が取れた後、避難所訪問は、地震、津波から更に原発で苦しむ福島に決めました。

今回で5回目の訪問になりますが、「避難されている方、お一人おひとりの声を、もっと聞いて、

何か支えになれないか」「心身ともに、立ち上がれないでいる方がたと直に触れ、何か次の一步を踏み出せるキッカケがつかめないか」と、一人、思いだけは先行しています。特に、次つぎ縮小されていく避難所、閉鎖されていく避難所で、「避難所難民だけは作らないように」と願います。3月、4月、5月初めまでは、夜になると冷え込み、暖房がままならないなか、寒さとの戦いでした。現在は外気からのセシウムの量や、風向きなどで窓は閉められ、猛暑が容赦なく襲ってきます。

国は7月に「避難所の熱中対策で、冷房などの費用に関し、国費で負担する通知を出した」と明言していますが、未だに実行には至っていません。当てにならないものを承知で当てにしても、始まりません。

避難所の食事にしても、オニギリに日本古来の、特に放射線をブロックするといわれる良質の塩を取り入れる、また放射性物質を排泄するのにはもってこいの、梅干し、みそ、しょうゆなどを取り入れるために、できる限りの支援を続けたいと思っています。

今回の福島第一原発の爆発によって、むきだしになった原子炉からの放射線は、どのような武器よりも恐ろしいものだということを、一人ひとり再確認すること。風に乗り、空気となつて人体に入り込む「外部被曝から、内部被曝へ」の危険が明らかです。

被曝を食い止めるために、それぞれの地域で、今こそ本気で知恵を出し合い、一つひとつの問題に取り組んで行くことを切に望みます。

今回の福島避難所訪問は、9月の予定です。

(NPO法人「がんを学ぶ青葉の会」代表)



避難所で「タオル帽子」を届ける松尾俱子代表



たいへん好評で行列に。中央が松尾俱子代表

がん患者とその家族たちでつくる福岡市のNPO法人「がんを学ぶ青葉の会」(松尾俱子代表、会員約200人)の会員たちが、東日本大震災で避難生活を強いられている人たちにかぶってもらおうと、「タオル帽子」の製作に取り組んでいる。松尾代表は、22日から、福島市などの被災地を訪れ、できあがったうち、50個を届けることにしている。

タオル帽子は、もともと、抗がん剤の副作用で髪が抜けた患者向けに考案された。盛岡市の市民団体〈岩手ホスピスの会〉が、肌ざわりの良いタオル帽子の普及に取り組んでおり、同会の型紙を活用して各地に広がっている。

糸田町を拠点にしている福祉グループ「あゆみ」(植高泰子代表)も、約2年前からタオル帽子づくりに取り組んでいる。会員の原正子さん(57)からタオル帽子の良さを教えられた松尾代表が、今月上旬から1週間ほど被災地を訪ねた際、タオル帽子を、見本として持参したところ、どの避難所でも、タオル帽子が人気の的だったという。

被災者に身近な要望を尋ねると、女性からは世代を問わず、「風呂でゆつくりと髪を洗いたい」という声が出る。避難所での入浴時間は15〜20分で、髪を十分に乾かす暇もない。それだけに「タオル帽子をかぶれば、洗い髪でも買物に行ける」と好評だった。80代の女性も「これで避難所でも、みんなの前を歩ける」と喜んでくれたという。

「あゆみ」の会員は、16日、糸田町内の公民館に30数人が集まってタオル帽子づくりに精を出した。タオル帽子はすべて手縫いで、タオル1枚から一つの帽子が1時間半ほどで完成する。この日の作業で100個ができあがった。〈青葉の会〉の会員の中にも取り組む人がでてきた。

〈青葉の会〉は、帽子の素材となる未使用のタオルの提供も呼びかけている。問い合わせは松尾さん(090・3193・9676)へ。

(5月19日・朝日新聞掲載)



映画「おくりびと」のモデルとなった
「納棺夫日記」著者

青木新門講演会

「いのちのバトンタッチ」

日時 9月11日(日) 開場 12:30
開演 13:00~16:00

会場 福岡市早良市民センター
福岡市早良区百道2-2-1 電話:092-831-2921

前売り 2,000円 当日 2,500円

闘にも負けない
光を放とう

■13:00~歌とトーク 13:40~講演 15:15~質疑応答

講師/
青木新門(あおき しんもん)氏プロフィール

1937年4月11日、富山県に生れる。早稲田大学中退後、富山市で飲食店を営むかたわら文学を志す。吉村昭氏の推挙で『文学者』に短編小説『柿の灰』が載るものの、経営する店が倒産する。1973年、冠婚葬祭会社に入社、納棺専任社員(納棺夫)となる。1993年、葬式の現場の体験を『納棺夫日記』として出版しベストセラーとなる。2008年に『納棺夫日記』を原案とした映画「おくりびと」がアカデミー賞を受賞して再び注目される。



“一粒の種”

砂川恵理歌
歌とトーク



砂川恵理歌さんプロフィール

沖縄県宮古島市出身 沖縄県在住
06年デビュー以来、4作のCDを発表。09年に発表したシングル「一粒の種」がNHKのドキュメント番組で取り上げられたことなどがきっかけに、沖縄はもとより、全国で多くの支持を得る。介護職の経験をもつ異色シンガーでもある。

“がんになっても安心して暮らせる社会に”との願いのもと、私達、がんを学ぶ青葉の会は患者と家族の情報交換の場として設立、2010年8月NPO法人化、2011年4月設立8周年を迎えました。今回は青木新門氏の講演と砂川恵理歌さんの歌を企画致しました。青木氏の「全存在を丸ごと受け止めることの大切さ」、「生かされていることを実感し、いのちはバトンタッチしてゆくものだ」というメッセージと、恵理歌さんの「人間の命の尊さ」をテーマにした歌とともに、前向きに生きる力、希望と勇気をお持ち帰りいただけたら幸いです。

NPO法人がんを学ぶ青葉の会 代表 松尾俱子

主催:NPO法人がんを学ぶ青葉の会 事務所 〒811-0206 福岡市東区雁の巣2-15-22

【問合せ・申込み】 松尾俱子 090-3193-9676 村田広志 090-9403-7405 E-mail:info@hakata.main.jp

申込み方法

チケットご希望の方は、参加費2000円×入場希望人数分をお近くの郵便局で下記の口座にお振込みください。青葉の会講演会 ◆ゆうちょ銀行 郵便振替 01790-0-58010
講演会当日に「振込み控え」をご持参ください。その控えが参加券となります。

後援◆読売新聞西部本社・西日本新聞社・毎日新聞社西部本社・朝日新聞西部本社・福岡県・福岡県教育委員会
NHK・テレビ西日本・九州朝日放送・福岡市・福岡市教育委員会・宗像市・宗像市教育委員会

被災地でボランティアをして

宮本 久美子

3月11日の大震災と津波によって、東北の太平洋沿岸は大きな被害を受けました。そして、福島第一原発事故により福島県の人びとは故郷を追われ、日々放射能の恐怖におびえて暮らしています。

被災された方がたのことを思うと、私も心が痛みます。

何かできることはないかと思いながら毎日が過ぎてしまいました。

仙台の知人たちの炊き出し支援活動に協力することで一歩を踏み出したいと思い、6月26日に夫と二人で仙台に行きました。

仙台に着くと、海岸沿いの荒浜地区に知人と向かいました。車で走りながら、被害の様子を案内してもらいました。ニュースや新聞などで被害の状態は少し知ってはいましたが、実際に悲惨な状態を目の当たりにすると、まさに言葉を失う状態でした。

特に仙台東部有料道路から海側の地域は、想像を絶する状態でした。道路一本隔ててまったく別の世界なのです。東部道路の西側の仙台市中心部は、地震や津波があったのか、とさえ思えるほど日常の風景がありました。

ここに暮らしていた人びとの住宅や道路や暮らしや商店や学校が、まさに根こそぎ破壊され

た状態でした。

海の近くにある潮音荘という名前の老人ホームは、一階部分は跡形もなく、津波にさらわれた状態でした。

その近くには、住宅の基礎だけが50軒くらい残っているだけで、家の建物は跡形もなく流された一角がありました。立派な門構えを見ると、どの家も新築10年以内の家ではないでしょうか。おそらく、どの家も、ローンがたくさん残っていたのではないかと思います。この家に住んでいた人たちの命は、助かったのでしょうか。

その住宅地の隣には、墓地だったと思われる一角がありました。数多くの墓石が無残に倒されたり流されたりしていました。形をとどめる墓石は一箇所に集められ、うずたかく積みまれました。

津波に襲われた直後は、おびただしい数の



津波で破壊された墓石

車が漂流していたのだと思います。

震災後100日くらいたった今日でも、流された車が、田んぼのいたるところに放置されていました。田んぼの中は重機を入れるのも難しいため、漂流した車の撤去にも時間がかかると思います。住宅地では、真新しい車が住宅の玄関先に頭を突っ込んでいました。

想像だになかった巨大な津波によって、車も、家も、船も、田んぼの中に横たわっていました。

被災者への具体的な生活支援を、一刻も早く

仙台市若林区六郷の六郷中学校で、炊き出しの支援を行ないました。私たち夫婦と、仙台の労働者・学生5人の、計7名で料理をしました。

被災者の夕飯は弁当ですが、「夕飯に添える汁物を」ということで、この日はシチューを作ることにしました。体育館前の手洗い場で野菜（ジャガイモ、玉ねぎ、にんじん）を洗いました。昼過ぎから強い雨が降り続いていました。手洗い場の上に張ったブルーシートの継ぎ目から雨が流れ落ちて、びしょ濡れになりました。仕事のになりました。他のボランティアの人たちと手洗い場を交代で使いました。出入り口にも近く、ここでの調理は難しいので、渡り廊下の端の、校舎側の屋根の下に長机を二脚置き、まな板や材料を並べて、みんなで料理しました。

書類上では160人くらいの被災者が生活しているということだったので、シチューを150人分くらい料理しました。大鍋二つ分です。シチューのルーは、業務用1キロのものを3箱

使いました。鶏肉もたっぷり入れて、「ハイ
できあがり」です。

12時半頃から料理を始め、途中休憩をはさ
み、5時には完成しました。途中で、避難所
を警備している警察官が顔を出しました。佐
賀県から派遣されてきているとのこと、もう
すぐ出身の佐賀県に帰ることができるそうです。

体育館の入り口では、ボランティアの学生
たちが、体育館の外を掃除していました。

入り口には、「被災者と関係者以外は立ち
入らないでください。」の貼り紙がありました。
「そうだ。被災者にとっては避難所は生活の
場だから、マスコミなどが興味本位でどんど
ん取材されたらたまらないよ」と感じました。

さて、おいしいシチューが出来上がり、鍋
を慎重に運んで体育館の中へ。机の上に段ボ
ールを敷いてもらい、発泡スチロールのお椀
にシチューを入れていきます。数多いお椀に、



六郷中学校で炊き出しをする筆者

こぼさず、汚さず、火傷しないように、お玉で入れていくのは、結構、難しかったです。

世話役の男性と女性の方から、繰り返し丁寧なお礼の言葉をいただきました。大したこともできず申しわけないと思っていた私にとって、とても嬉しいことでした。

体育館の中に、「夕飯を取りに来てください」と館内放送が流され、順次みなさんが弁当とシチューを取りにきました。70歳ぐらいの年配の方から小学校就学前の子どもたちまで、みな様に疲れているように感じました。津波から100日たっているのですから、当然です。体育館というプライバシーのない空間で、将来の展望をどうやって見つけていくのかを思いながら生活することは、ストレスが一杯で、本当に辛いことだと思います。幼児や年ごろのお子さんのいらつしやるご家庭は、さぞ困っていらつしやると思いました。

私が配膳している間に、「〇〇先生がいらしてくださいました。具合の悪い方は診てもらってください」という放送が入りました。

机が置かれた一角で、ボランティアの医師が被災者の体調を聞いてあげている様子でした。夜7時から、「男はつらいよ」フーテンの寅さんの上映会が体育館であり、その準備も同時に進んでいました。長い避難所生活を少しでも改善しようと、みなさんが努力されています。いろいろなことを思いながらシチューをお椀に入れてみると、「おいしかったです。お代わりいいですか」と、多くの人たちに言われました。喜んでもらって、とても嬉しかったです。登録人数よりも実際に避難所にいる人の数は少ないそうで、シチューには余裕がありました。

昼前から準備を始め、片付けが終わったのは夕方6時半を過ぎていました。弘前を出発した

のが午前4時。長い一日の大部分が終了しましたが、まだ長い帰路が残っていました。私たちがボランティアした日から1、2週間ほどで六郷中学校の避難所は閉鎖され、近くにできた仮設住宅に、多くの人たちが移っていったそうです。

個人で始めた支援プロジェクト

仙台の申孝信さんは、「女川町立女川第二中学校支援プロジェクト」を行なっています。女川二中は出島いずしまにある生徒数13名の小さな学校です。震災後は女川一中に間借りして勉強をしています。申さんは、女川二中の先生との縁で、このプロジェクトを始めたそうです。学校運営の資材や教材の支援や、課外活動のサポートと出島復興のため父母たちの支援など幅広く行なっています。

鍼灸師の申さんは、宮城県の南部、福島県との県境の山元町の避難所で、鍼灸、マッサージとコーヒーマッサージのボランティアもしています。

「7月10日に申さんが山元町に行く」と伺い、弘前の友人たちも山元町に行くことにしました。申さんによると、「被災地は衛生状態が悪くハエが大発生し、ハエ取りリボンを大量に必要としている。化学薬品の殺虫剤よりもハエ取りリボンが いいのだが、仙台でも手に入りにくい」ということでした。「弘前なら、あるのでは」と探してみましたが、やはり殺虫剤が中心で、ハエ取りリボンは、とても少なかったです。店をいくつもまわり、山元町に行くまでに100

個(5本入り)ほど、買い集めました。

厳しい暑さの中で「泥出しボランティア」

9日夜、夫たち四人は車で弘前を出発し、途中高速道路のサービスエリアで仮眠しながら朝5時に石巻市日和山に着きました。友人たちは、眼下に広がる海岸沿いの津波被害に声が出ませんでした。一人ひとり、それぞれ深い衝撃を受けとめていたようです。朝もやの中にみえた場所では建物がほとんど破壊され、瓦礫が見えるだけでした。日和山で毎朝祈りをささげる人がいました。

石巻を離れ、仙台東部道路に入ると、荒浜地区が見えてきます。私が見た2週間前と比べて重機が多く見られ、自動車や松なども少なくなってきたようです。

7時半に山元町役場に着き、8時からのボランティア受け付けを待ちました。広い役場の駐車場は乗用車やバスで埋まっています。東北各県のナンバーのほか、関東のナンバーもあります。神奈川からの大型バスも到着し、40人ほどが降りてきました。この日は200人ぐらいになりました。

受け付けを済ませると、作業が割り当てられます。弘前からの4人は他のグループの人と8人でチームを組みます。山元町の近くの町に住むというリーダーの指示のもと、8時半過ぎに現場に着きました。この地区はJR常磐線より山側で、家屋は残っています。一見、被害は少

ないように見えたが、家に入ると2メートルもの津波が入ってきたのがわかります。床上1・5メートルの壁に、跡が残っています。この家には、おばあさんが一人で住んでいましたが、津波のときは二階に逃げて無事でした。道路際のブロック塀の所には、流れてきた自動車何台もあったようです。

この日の作業は、床下にたまった泥出しです。すでに中の家具などは片付けられ、床下のヘドロも台所と居間を残すだけでした。もとの土の上に津波が残したヘドロが、5から10センチほど固まっています。色がまったく違うので、区別は簡単です。しかし、床組の垂木にスコップがひっかかり、すくい取ったヘドロを、土のう袋に詰めるのが大変でした。気温がどんどん上がり、暑さに身体が悲鳴をあげ始めます。長袖、マスクをしなければならぬのですが、ガマンがでせず、ジャンパーを脱いでしまいました。額の汗が目に入り、マスクの中も鼻や口の回りから下の方に汗が流れているのがわかります。

作業開始から一時間半ほどたった9時57分、強い揺れを感じました。

「強いぞ、かなり強いぞ。早く家から出よう」と声を掛け合いながら庭に出ました。3月11日の地震と津波の被害を受けた家の中にいたのですから、かなり怖いものです。数分後津波警報が発令されたと役場から連絡があり、急いで高台の役場駐車場に戻りました。海のない弘前に住む4人にとって、初めての津波警報での避難でした。

この避難時間に、公民館で、鍼灸、マッサージのボランティアをしていた申さんに、ハエ取りリボンを渡しました。コーヒーもいただきました。

警報解除後の午後に作業再開。泥出しの後、家の周りに流れ着いたゴミ片付けの作業終了。役場に戻ったのは4時を過ぎていました。長い1日でした。

200人ものボランティアが集まっても、泥出しチームを組めるのは20組ほど。20軒分しかできません。それも、1日で片付けきるわけではありません。被災家屋の数から考えると、まだまだ気の遠くなる状況です。様々な作業があり、ボランティアは、まだまだ必要です。

ただ、中高年4人組は、弘前に戻っても熱中症なのか疲労なのか、2、3日ぐったりしていました。彼らから、「もう一度、泥出しのボランティアに行きたい」という声を私は聞いていません。それほど大変な仕事でした。ただボランティアをする意欲があります。

仙台市若林区日辺の仮設住宅での炊き出し

6月に私が行った六郷中学校の避難所が閉鎖され、近くの日辺グラウンドの仮設住宅に、多くの人が移りました。

7月17日、六郷中学校の時と同じ仙台の労働者の炊き出し支援に、弘前から夫と参加しました。この日は200人分の五目ちらしを作る予定でした。大きな釜で、一度に5升の米を炊きます。「夕食に」と考え、10時から準備を始めていたところ、11時頃には「お昼に食べられますか」と、多くの人から声をかけられ。「お昼に間に合わせよう」と、ご飯支度を急ぎました。

釜は二つ。炊きあがるのに40分かかります。

12時には50人ほどが並びました。食器は各自持参でお願いしました。みなさん鍋、タッパー、どんぶり、皿など、様々な入れ物です。「うちは3人分お願いします」「うちは5人分」と並んだ人数の何倍もの五目ちらしが、器に入っていきます。何度炊いても間に合いません。途中で無くなってしまうました。まだ10人ほどの人が残っていました。「申し訳ありません。30分ほどお待ちください」と謝りながら作り続けました。皆さんに喜ばれたようで、本当に嬉しかったです。

仮設住宅に行政はもつと援助を

仮設住宅に入ると、電気、水道、ガス、食費と、一切合財自分持ちになってしまいます。

日辺の仮設住宅には荒浜地区の人が多く入居しています。津波により家を失い、田畑を失い、家族をも失った人たちです。

でも行政は「避難所を出たら自立しろ」と、一切の援助を打ち切ってしまうのです。炊き出しは、避難所だけでなく仮設住宅でも続ける必要があると感じました。山元町のように被災地の片付けのボランティアも必要です。ボランティアをやって、そう感じました。私たちは同じ東北に住んでおり、被災地のことはテレビや新聞で知っていると思ひ込んでいました。しかし、実際に仙台・石巻・山元町に行き、被害を見て、ボランティアをして、知らなかったことの多いことに気付き、強い衝撃を受けました。

（おばさん通信編集会／青森県在住）

玄海原発を止めたい

末永 節子

私たちも立地自治体

風下の民

私は九州の福岡県福岡市に住んでいます。西隣に佐賀県があり、佐賀県東松浦郡玄海町には九州電力玄海原子力発電所があります。すべて加圧水型軽水炉で、1号機（運転開始1975年）、2号機（1981年）、3号機（1994年）、4号機（1997年）の4機あります。「大事故を起こす前に、福岡、浜岡に続き、ぜひ廃炉にしてほしい」と思っています。

九州電力玄海原子力発電所（佐賀県玄海町）から半径30キロ圏にある、福岡、佐賀、長崎県の7市1町は、東京電力福島第一原発事故を踏まえた、防災対策の強化などを話し合う事務担当者レベルの協議会を開き、立地自治体並みの九州電力との早期の安全協定締結、避難道路の整備、安定ヨウ素剤の配布拡充などを求めています。当然のことです。

偏西風が吹き、西風の吹く日が多い北九州地方は、原発の風下にあたります。福島県の飯館村は、福島第一原発から47キロ。計画的避難区域になりましたが、福岡市は、もっと近い37キロ地点です。

玄海原発をすぐに止めたいのには理由があります。

プルサーマル問題 MOX燃料

3号機は、2009年11月、日本で初めてMOX燃料をウラン燃料用の原子炉で燃やすプルサーマル運転を始めました。

ウランには、核分裂しやすい(燃えやすい)ウラン235と、核分裂しにくい(燃えにくい)ウラン238があります。ウラン燃料は、燃えやすいウラン235の割合を、3～5%に高めたものですが、この燃えやすいウラン235の代わりに、再処理工場で使用済み核燃料から取り出したプルトリウムを使うのが、ウラン・プルトリウム混合酸化物[Mixed Oxide]燃料、つまりMOX燃料です。燃やすことによって、プルトリウムのまわりのウラン238が、プルトリウムに変わります。「そのプルトリウムをまた取り出し、再処理してMOX燃料にすれば、(またはもんじゅなどの高速増殖炉で燃やせば)永遠に燃料を得ることができる」という、核燃料サイクルの考え方です。実際には2度目の使用で、プルトリウムの割合が高くなりすぎ、危険で再処理できなくなるので、永遠には使えません。夢物語です。

MOX燃料の大きさや形は、現在、原子力発電所で使っているウラン燃料と全く同じです。

プルサーマルが危険だと言われている理由

*ウラン新燃料に比べ、放射能が高い(特に中性子が著しく高い)ため、燃料の製造については、

遠隔操作化を行い、作業員の不要な被曝に十分配慮して行う必要がある。

*ウランの中にプルトニウムを混ぜることにより、燃料の融点が下がる。これにより燃料が溶けやすくなる。

*また熱伝導度等が、通常のウラン燃料よりも低下する。これにより燃料温度が高くなりやすくなる。

*核分裂生成物が貴金属側により、またプルトニウム自体もウランよりも硝酸に溶解しにくいため、再処理が難しい。

*FPガスとアルファ線（ヘリウム、ガス状）の放出が多いため、燃料棒内の圧力が高くなる。
*性質の違うウランとプルトニウムをできる限り均一に混ぜるべきであるが、どうしてもプルトニウムスポット（プルトニウムの塊）が生じてしまう。国は基準を設けて制限しているが、使用するペレット自体を検査して確認することはできない。

などの問題点があり、フクシマ原発の事故でも、影響を深刻にしたと考えられます。詳細なプルスーマル運転による事故評価を、福島について政府は発表していません。

核燃料サイクルは、すでに破綻した

プルスーマル運転は、核燃料サイクルの破綻を隠すためのアリバイのようにして、強行されているものです。

原子力発電所で使われた核燃料の「燃えかす」(使用済み燃料)から、プルトニウムや燃え残りウランを取り出し(これを「再処理」と言います)、再び燃料として利用する仕組みを「核燃料サイクル」と呼んでいます。

政府や電力会社は、リサイクルによってウランを有効利用できるとか、プルトニウムはエネルギー資源の乏しい日本にとって貴重な「準国産エネルギー」だと言って、この仕組みづくりを進めようとしています。

しかし、今では、このようにしてプルトニウムを利用しようとしているのは、日本だけで、もんじゅは失敗続きです。ほかの先進諸国はやめてしまいました。世界中が、高速増殖炉計画から撤退してしまいました。核燃料サイクルは破綻しています。

それは、余りに危険で、技術的にうまくいかない上に、経済的にもメリットがなく、さらに核爆弾の原料になるプルトニウムを増やしてしまうなど、さまざまな問題がはつきりしてきたからです。

地震

2005年3月20日の福岡県西方沖地震の際、玄海原発では、揺れを観測しました。

3号機補助建屋で震度4を観測し、3号機原子炉建屋の基礎部分では水平方向で85・0ガル、鉛直方向で54・2ガルの最大加速度を観測しましたが、「被害はなかった」と報告されました。

東日本大震災のような大型の地震は、設計上想定されていません。東日本大震災級の地震を想定した、新しい耐震基準で評価し直すべきなのに。

津波の対策も、非常用電源車の配置のみです。新たな見直しは、されていません。

1号機の老朽化問題

1号機の脆性遷移温度が、1993年に56℃、2009年には98℃と、上昇しており、専門家からは、「想定以上に老朽化が進んでおり、緊急冷却の際に、原子炉压力容器が破損する恐れがある」と指摘されています。なお、九州電力側は、「脆性遷移温度を測定するための試験片を、压力容器より炉心に近い場所に置いてあることから、現在の脆性遷移温度は80℃と推定している」としています。そうだとすると、急激に脆性遷移温度が上がっており、危険な水準です。脆性遷移温度のデータ開示は、要求してもなかなか行われず、原発推進派の岸本英雄玄海町長でさえも「廃炉の議論を、今すぐにでも始めなければならぬ」と述べています。

玄海原発は 過去にも様々なトラブルをおこしている

*1998年7月18日——1号機で定格出力運転中、復水器細管漏洩により出力低下。

*1998年1月20日——3号機定期検査中、燃料集合体シッピング検査の結果、1体に漏洩

を発見。

*1999年3月31日——2号機定期検査中、蒸気発生器伝熱管の渦流探傷検査の結果、管板拡管部に有意な信号指示を発見。

*2008年6月20日——4号機の冷却水圧に異常を検知したため自動停止。

*2010年12月9日——3号機の一次冷却水のヨウ素濃度が、これまでの平均値の4倍以上昇。燃料棒に穴が生じ放射性物質の漏洩が確認される。同年12月11日より第13回定期検査を前倒しして実施し、現在まで3号機検査停止中。

献金問題

玄海原子力発電所の所長ら九州電力幹部社員が、2005年以降に、古川康・佐賀県知事の政治団体に対し、毎年3万円を寄付していたことが判明しています。同社幹部らは、「個人献金である」としているものの、「事実上、個人献金の形を取りつつ、政治資金規正法によって禁じられている企業献金が行われている」との指摘が出ており、原発がらみの献金ではないかと思われます。

また原発を推進する電力会社の労組である電力総連（全国電力関連産業労働組合総連合）の政治団体「電力総連政治活動委員会」と、その関連政治団体が、2007～09年の3年間で、献金やパーティー券購入、研修会費などで、少なくとも9100万円を民主党側に提供していたことがわかりました。（原子力村ぐるみ）です。

やらせメール問題

定期点検で止まっている玄海原発2、3号機再稼働に関する佐賀県民向けの説明番組をめぐり九州電力の「やらせメール」問題では、九電の第三者委員会でのようなことが起こった原因やいきさつを調査しています。原子力保安院、九電と古川知事ぐるみで、原発推進ありきの説明会を開こうとし、発覚すると、お互いに責任をなすりあっていることが明らかになっています。

じつは、早い段階で内部告発された方があり、私たちも情報をつかんでいました。しかし、今までも原発をめぐって行われた、「住民の意見を聴取する」というあらゆる場で、「やらせ、仕掛け」が横行しており、今回も「ああ、またか」と、見過ごした私たちも、感性がすり減っていたと言わなくてはなりません。

証拠隠滅問題 道徳なき商業

上記、第三者委員会の調査が入る前に、九電では「私的な文書は整理するように」の指令が流れ、いわば証拠隠滅が行われました。モラルは地に落ち、原子力平和利用3原則の自主民主公開は踏みにじられてきました。

後手後手にまわる政府 理念無き政治

政府が国民を本気で守ろうとしているとは思えません。いまだに、福島原発事故の正確な情報の開示されず、すぐに必要な子どもたちの健康に影響する、放射能値すら、後手後手に発表される始末です。補償問題をおそれ、被害がなかったように見せかけるのが目的なのでしょうが、命に関わる問題です。原発労働者の健康問題も、深刻です。信用できない政府のもと、危険な玄海原発は、すぐに止めたい。

私たちは、ばかにされている

プルサーマル運転を日本で一番先に実施した玄海原発。九電の社長は、「九州は反対運動が弱いから」と、実施を決めました。私たちの運動はばかにされてきました。二度と許さない。相手よりも一日でも長く、少しでも強く、反対していきましょう。

今、私たちは「さようなら原発1000万人署名」の行動に取り組んでいます。だれが考えても危険な原発から、撤退するチャンスです。「さようなら原発」と検索して頂いたら、関連の行動の情報、資料、署名用紙などを手に入れることができます。未来の子どもたちに恥じない行動が問われています。

(I女性会議 福岡県本部副議長)

こんな大事な時だからこそ、

是々非々で事態を見抜く力を！ 小川 みさ子

まず申し上げておきますが、私は、菅政権を支持する立場でも不支持の立場でもありません。ただ、今、言えることは、もうすぐ今の政権が終わるということです。そこでは々々非々で、3・11以後の原発問題を分析してみます。

この間、過去最悪、世界最大規模の3・11原発事故を起こした東京電力の責任よりも、むしろ、「この政権、つまり菅総理批判、そして、ポスト争いに集中していた」という感を否めません。今の政権でなければ、子どもたちの被曝は救われたのでしょうか？ 人類や生き物に影響を及ぼす問題は、「疑わしきは使用せず」という良識でもって判断すべきですが、今回は、御用学者を登用しての楽観的な事故の過小評価が優先され、命が、ないがしろにされてしまいました。想定外だから仕方がなかった……が、免罪符のように使われています。想定外であったのなら尚のこと、長年このような事態を想定し訴え続けてきた市井の学者たちを集めて、プロジェクトを作り、彼らの知恵を借りなかったのか。——現政権の力量のなさが、悔やまれます。このことが、今の政権の、一番まずかったことではないでしょうか。

100億円、20年という、長い歳月と巨額の税金を費やした、緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）が、政府により隠され、公開されなかったこと。そしてメルトダウンを2か月も隠したことで、多くの子どもたちに、「しなくてもよかった被曝」をさせてしまったこと。これらは天災ではなく、人災といっても過言ではありません。

このSPEEDIによる予測が公表されなかったことは実に致命的なこと。また、3月下旬に1、150人の福島の子どもたちを調査した結果、その中の45%が甲状腺被曝していたことが分かったそうですが、放射性ヨウ素の吸入後であっても、8時間以内であれば約40%、24時間以内であれば7%程度の取り込み阻害効果が認められるという「ヨウ素剤」が、メルトダウン隠しのため配布されず、今後多くの、とりわけ子どもたちが、甲状腺の異常に脅え続けなくてはならないこと。このように命を優先しなかったことは、まるで見殺しにされたのと、同じことで、悔やむに悔やみきれません。

アメリカは、東京にいるアメリカ人の避難を検討しましたが、日米同盟を重視して、やめたそうです。フランスは、臨時便を出して自国へと避難をさせました。25年前のチェルノブイリ原発事故の際、旧ソ連政府は、チェルノブイリに近いプリピャチから避難させるため、警察と内務省の職員を動員して、休んでいた運転手までも探し出し、1200台のバスと240台の自動車を動員して、あつという間に避難させたそうです。この違いは何か。そして日本でこれから何が起こるのか。

「それでも今の政権だからやれた」という、忘れてはならないことも、あります。

まず、菅総理は、福島第一原発の事故を受けて、定期検査で停止中の浜岡原発3号機、運転中の4、5号機の運転を停止させ、文科省は、菅総理の脱原発宣言を受け、「高速増殖炉(もんじゅ)の開発中止も含め検討する」と言明。そして、広島と長崎の平和宣言でも、菅総理は挨拶の中で、「原発依存からの脱却」を明言したのです。政権が変わったとして、果たしてこれ上のことと望めるのでしょうか。後退するのは想像に難くない。また、「総理が、唐突でなく、私的でもなく、議論を重ねていたら、このような脱原発宣言ができたか」と問われれば、私は、首を横にふりたい。

現政権の、メルトダウン、SPEEDI情報の隠蔽は、取り返しのつかない最大の汚点だ。それでも今後、放射能汚染との闘いなど、これから考えた場合、「脱原発」が今より後退しなくても困る。安全神話が崩壊し、まだまだ必要神話をマスコミに宣伝させたい向きは多いから油断はできない。日本の原発54基中、8月末で40基が止まる。マスコミは今までの罪滅ぼしとして、「原発がなくても大丈夫」と主張し、「核廃棄物の処理を入れると危険なだけでなく高すぎる原発」の正体を、わかりやすく伝えるべきだ。そして、国民も、マスコミ情報を鵜呑みにせず、メディア・リテラシーを高め、不都合な真実、本質を見抜く力をつけ、(民意を反映し、生命の側に立った、選良)を選ぶ力を育てることが、試されているのだと思う。

被ばく労働者を踏み台にした

〈命の規制緩和〉は許せない！ 小川みさ子

被ばく労働者を搾取し、犠牲にし、それでも原発からの電気を使いたいのですか!?

3・11前からずっと、訴え続けてきたことです。労働安全衛生法に基づく電離放射線障害防止規則は、通常時の原発作業員の被ばく線量の限度を1年間で50ミリシーベルト、累積被ばく線量限度は5年間で100ミリシーベルト以下と定めている。このままの限度でも、一般市民の年間1ミリシーベルトに比べると、その50年分が「1年間で浴びていい線量」ということになる。

3・11直後の3月15日、厚労省は省令で、全国約7万人いるといわれる、「原発作業従事者の被ばく線量の上限」を、福島第一原発事故に関わる作業員の緊急時の場合の累積被ばく線量限度を、年間100ミリシーベルトから250ミリシーベルトに引き上げた。通常時は変えていなかったが、4月27日、通常時の原発作業員の被ばく線量の上限を撤廃した。十分な放射線に関する教育もなく、線量計も渡さず、放射線管理者を置かないで作業をさせたなど、ロボット投入も失敗が続き、手の施しようのない中、作業員の健康問題が十分検討されているはずもないだろう。

さて、私が被ばく労働について初めて知ったのは約30年前のこと。放射能の恐ろしさを知っ

たら、誰しも放射能汚染から身を守りたいと思う。でも、それを知らされずに、命の危険にさらされながら働く人たちがいることを知った時のショックが、私の反原発、脱原発のエネルギーとなり、今に続いているのです。

私の手もとに1983年の育児日記がある。その日記をここに、そのまま掲載してみます。

1983年2月24日(木) 夜10:00～10:30

NHKの番組 ルポルタージュにつぼん「原発定期検査」を見た。各地から労働者が集まり、寮や民宿を利用し、日当7,000～10,000円で放射能にまみれて働くのだ。ショックを受けた。

前に鹿大の橋爪先生がみせてくださったデンマーク映画「知られざる原発」を思いながら、この映画も、そしてこの番組も、もう一度みたいと思った。また、先月の正月映画「チェーン・リアクション」にも、放射能の恐ろしさがよく描かれていた。つくづく核の恐ろしさを、再認識させられた。

※この番組は、大飯原発が舞台で、埼玉の川口市にあるNHKアーカイブスという施設で見ることができるということを、28年を経た昨年、NHKのディレクターが調べて教えてくれた。

※映画「チェーン・リアクション」は、1980年のオーストラリア映画。オーストラリアの中西部を地震が襲い、それがもとで放射能が漏れるが、その事実を抹殺しようとする公団側に、自らの肉体を犠牲にして挑む科学者と若い一組の夫婦の活躍を描いた作品。

1983年2月26日(土)

昨日の配達(有機無農薬野菜の宅配)で、事務局長から、1979年に発行された「原発ジブ

シー」という本を借りた。原発のことをもっと知りたい。とりあえず、メモしておくことにする。(「原発Ⅱ科学」の虚妄を剥ぐ体験ドキュメント! 堀江邦夫著「原発ジブシー」現代書館)。「私がそこで体験したものは、放射能に蝕まれ、「被ばく者」となって、吐き出される棄民労働のすべてだった」と、表紙にある。胸がドキドキする凄いドキュメントだ。

敦賀原発、美浜原発、福島第一原発について

(※当時は、まだ川内原発は稼働していなかった!)

○ホールボディカウンター(ゲート・モニター) ↓ 美浜原発

○ハンド・フット・モニター&サーベイ・メイター(端末を片手に持ち身体を測定) ↓

福島第一原発(正確には手首から先と足の裏側を計測) ⇄ いい加減! ゲートモニターは、社員のみ使用。露骨な差別だ……。

放射教育(放射能管理教育)で、なぜ、「マスクの正しい着用方法」を教えないのだろうか? 危険で恐ろしい「内部被ばく」から肉体を防護してくれるマスクだ。それなのに……。

「原発」と「原発」の相違点とかより、現場で常に放射線にさらされている労働者には、放射能(線)の危険性と、そのための徹底した防護方法こそを教えるべきだ。

原発闘争情報36号より……1977年4月22日、福島3号炉にて発生した下請労働者の転落死亡事故。東電当局は、管理区域外への搬出を押さえ、出血もひどいため、除染もうまくできないまま、全身放射能まみれのまま放置したという(一説では、1~2時間も)。原発から原

発へと渡り歩く底辺労働者＝原発ジブシーの一人として、美浜、福島第一、敦賀の各原発において、放射能下の被ばく下請労働を体験した堀江邦夫さんのあとがきから、一部抜粋する。

『近代科学・技術の最先端を行くといわれている原発だが、中央操作室で計器類を監視し、スイッチを押す電力会社社員は、そのほんの一部で、人数面からも仕事量からも、下請労働者（日雇い労働者（あんこ）のほう）が圧倒的に多い。原発は、下請労働者の存在があつて初めて、原発としての稼働が可能なのである。言いかえれば、「現場の最前線に送り込まれ、放射能にまみれて働くことを強いられている労働者たちの姿を無視して、原発を語ることはできない」ということなのだ。

似たような例を、私たちは、いわゆる「戦記」に見ることが出来る。将校クラスの人たちが書いた戦記からは、当時の戦局やら作戦の全貌といった広い視野に立つての「戦争」を知ることが出来る。だが、戦争を俯瞰すること、森を見ることが出来る半面、木、つまり最前線で命を賭けて戦う兵士たちの恐怖におののいた顔や、断末魔の声、血の色、硝煙の臭いなどを見ることは難しい。やはりなんといつても、戦争の本性は、一兵卒の体験の中にこそ、存在しているのではないだろうか。

原発で働く労働者たちには、自分が生命体であることの証しである「生理」すらも、捨て去ることが強制されている。「生理」を疎外された人間が、コンクリート壁やパイプだけの無機物だけで構築されている原発内に入った時に生じる肉体の無機質との激しいせめぎあい、この軋轢こそが肉体の叫び声であり、私のいう〈痛み〉なのだ』

※この本が発行されて実に32年が経過しようとしている。堀江邦夫さんの7か月にわたる体験、文章に、

目を通してくれたという大阪大講師だった久米三四郎さんも亡くなられた。「原発ジプシー」の2年後に発行の「闇に消される原発被曝者」の著者である樋口健二さんが写真を提供している。あれから、30有余年、原発での被ばく労働者を踏み台にする社会構造は、何ら変わっていない。

※NHK「原発定期検査」の舞台、大飯原発で被ばく労働者とした働いた40代の男性にお話を伺った。彼は鹿児島県庁の近くにある公園で野宿暮らしをしていた1990年代に、俗にいう手配師から、「いい仕事がある」と誘われ、福井県の大飯原発に働きに出かけていた。私はホームレス生活者支援の夜回り活動がきっかけで男性と出会い、現場のお話を聞かせて頂いた。以下、そのQ&Aをお伝えします。

◎福井県の大飯原発で働いたことのある仮称・蘭田盛隆さん(40代)へのインタビュー

Q 原発で働こうと思われた動機は？

A 仕事がなく、野宿暮らしをしている時に、公園で誘われました。厳しい冬を覚悟していた秋の終わりでした。「これで、寒い思いをせず、屋根の下で冬が越せるし、日当も貰えるー」いい話だと思って直に決めました。

Q そうでしたか。原発といえば特殊な仕事ですよね。何か専門的な訓練とかあるのでしょうか。

A 原発に到着してカードが出来るまで約1か月待機しました。その間、訓練はなく、詰め将棋やトランプ、読書などをして過ごしましたが、日当が貰えました。

Q 原発の定期検査ですから、当然ながら被ばく線量をチェックされながら作業されるんですよね。放射能に関する知識や危険性については、現場に入る前に教わるのでしょうか。

A はい。安全教育を1回目は関西電力の食堂で、2時間×4日間、2回目の時は関連会社の立派な詰所で受けました。安全教育では、「放射能被ばくに関する国の基準があり、きちんと管理している」ということを教わりましたので、特に放射能を気にして働く仲間は、自分も含めていないように見えました。

Q 徹底した〈安全すり込み教育〉ですね。管理区域内外での仕事はいかがでしたか。

A 待合室で、自分の出番を下着姿で待ちます。上下長袖の下着を着け、自分のIDカードと線量計を内ポケットに入れ、布の青い帽子、靴下を履いて、白綿の手袋(メンテ)をつけ、現場に着くと、黄色のタイベック(防護服)と靴下を履き、メンテの上にゴム手袋をして働くのです。「どこがタービン建屋、原子炉建屋」といった説明はなく、タイベックをつけていない時でも、今よくテレビに出てくるブルーのキラキラ輝いているブルーの横を移動したり、垂直タラップを上がったりしていましたが、「あれって、もしかして燃料プール? だったのか」と、今頃、恐ろしくなります。当時は、何も意識せずに管理区域内の原子炉建屋で働いていた、ということになります。

Q 管理区域内であることを意識せずに働いていらつしたわけですね。それこそ放射能は見えないし、臭わないし、感じないので、基準以上の被ばくをしているかどうかは、わかりにくいですね。被ばくをされたことは、ありましたか。また、だいたいどれくらいの時間働くのでしょうか。

A 被ばくは二度しました。ボディカウンターでランプがついて、石けん、シャワーでこすつ

てランプが点灯しなくなるまで除染しなくては、退室ゲートの扉が開かないのです。

やっと退室できると、待機室に待っている仲間たちと一緒に、送迎バスで寮に帰宅できるというわけです。作業時間は、黄色のエリアでは約20分働き、青いエリアでは1〜2時間でした。一度、赤いエリアの炉心のところで部品交換をしたことがありましたが、さすがにこの仕事の時だけは多人数で訓練を受けました。誰かのアラームが鳴ったら即交替しなくてはならないからです。自分の場合、結局二度被曝しました。あちこちで、アラームが鳴り始めると無気味な思いをしました。

Q 被ばくされ大丈夫だったのでしょうか。放射線管理手帳に、作業員個別の被ばく履歴を記録するので、自分の被ばく量が分かるようになっていくわけですが、どうでしたか。

A 被ばく後、福井のH病院というところで検査を受け、数値が高いので、田舎に帰ったら大きな病院で検査を受けるようにと言われ、鹿児島に帰ってきたけれど検査は受けなかった。職長(まとめ役の人)に、自分の手帳をくれるようにと頼んだが、渡してもらえなかった。

Q 自分の命に関わる手帳を、渡して貰えなかったのですね。

A そうなんです。今でも腑に落ちません。だから自分の累積被ばく量は分らないままです。Q ちゃんと聞きにくいことですが、日当は、おいくら貰ってらっしゃったんですか。

A 上司に確認したわけではないのですが、毎日平均20分位の作業で、4〜5万円出ていたらしいですが自分には1万円前後でした。これも仲間うちから聞いた話ですが、他の会社の下請は8,000円という人も、いました。短時間で1万円なので、結構、割のいい仕事だと、

思っていました、本当はその4、5倍は出ていたのです。

Q いわゆるピンハネですね。放射能に身をさらし危険な作業をさせておいて、その危険手当も含まれているのでしょうか、危ない目にあつた本人の手元には2、3割しか届かない。被ばく線量の規制緩和も問題ですが、このピンハネ許せませんね。それでも手帳があれば働きたいと以前、おっしゃってましたよね。今でも定期検査の仕事に就きたいと思つてらっしゃいますか。

A 正直、3・11直後までは思っていました。その後、テレビニュースや小川さんの話で、放射能や被ばくについて、いろいろな情報を見たり聞いたりしているうちに、鹿児島井でいう、あとぜき(後)になつて冷や汗が出る思いのことがしています。自分の体調不良も、あの時の被ばくが影響しているのかなあ……と秘かに思っているところです。今、福島第一原発事故の収束のために、現場で働いている人たちに、どれくらい、本当のことを教えているのか、ちよつと疑問です。まさか、ピンハネとかされていませんよね。現場で働いていただけないで、複雑な思いでニュースに関心を寄せているところです。原発の危険性を知つた今、「すべての原発を廃炉にしてほしい思い」が日に日に強くなつてきます。

(インタビュール終わり)
いろいろとお話をお聞かせ下さつて、有難うございました。被ばく労働者の命を踏み台にしてまで、「原発からの電気」はいりませんね！しかも、「原発がすべて停止しても、まだ、電気は不足しない」というのですから、一緒に脱原発を訴えて参りましょう。来月は、お寺で皆さんにお伝え下さること、よろしくお願いします。

(鹿児島市・市議会議員)

児玉龍彦東大教授、国会で、

政府の放射線対策を批判「満身の怒り」を表明

7月27日、衆議院厚生労働委員会に、参考人として出席。

熱弁をふるう児玉教授の姿が、インターネットの動画サイトにアップされるや、たちまち大反響。アクセス数は、五十数万回に及んだ。

労働委員会議事録から 第23号 平成23年7月27日(水曜日)

参考人 児玉龍彦 私は東京大学アイソトープ総合センター長の児玉ですが、三月十五日に、大変に驚愕いたしました。

私も東京大学には二十七カ所のアイソトープセンターがあり、放射線の防護とその除染などの責任を負っております。私自身は内科の医者でして、東大病院の放射線施設の除染など、ずっと数十年かかわっております。

それで、三月十五日に、この図に、ちょっとかいてあるんですが、我われは、最初にまず、

午前九時ごろ、東海村で五マイクロシーベルトという線量を経験しまして、それを第十条通報という、文科省に直ちに通報いたしました。

その後、東京で〇・五マイクロシーベルトを超える線量が検出されました。これは一過性に下がりましたが、次に、三月二十一日に東京で雨が降り、〇・二マイクロシーベルト等の線量が降下し、これが今日に至るまで高い線量の原因になっていると思っております。

それで、このときに枝野官房長官が「差し当たり健康に余り問題はない」ということをおっしゃいましたが、私はそのときに、実際に「これは大変なことになる」と思いました。なぜかというと、現行の放射線の障害防止法というのは、「高い線量の放射性物質が少しあるものを処理すること」を前提にしています。このときは、総量は余り問題ではなくて、個々の濃度が問題になります。

ところが、今回の福島原発の事故というのは、百キロメートル圏で五マイクロシーベルト、二百キロメートル圏で〇・五マイクロシーベルト、さらにそれを超えて足柄から静岡のお茶にまで及んでいることは、今日、皆さんすべてが御存じのとおりであります。

我われが放射線障害を見るときには総量を見ます。それでは一体、今回の福島原発の総量がどれくらいであるか。東京電力と政府は、はっきりした報告は全くされておりません。

そこで、私どもでは、アイソトープセンターのいろいろな知識をもとに計算してみますと、まず、熱量からの計算では、「広島原爆の二十九・六個分に相当するもの」が漏出しております。ウラン換算では、二十個分のものが漏出していると換算されます。さらに恐るべきことには、

これまでの知見で、原爆による放射線の残存量と原発から放出されたものの放射線の残存量は、一年たつて原爆が千分の一程度に低下するのに対して、原発からの放射性汚染物は十分の一程度にしかならない。つまり、今回の福島原発の問題は、チェルノブイリと同様、「原爆数十個分に相当する量と、原爆汚染よりもずっと多量の残存物を放出した」ということが、まず考える前提になります。

そうしますと、我われは、「システム生物学」という「システム論的に物を見るやり方」でやっているんですが、現行の総量が少ない場合には、ある人に係る濃度だけを見ればいいのです。しかしながら、総量が非常に膨大になりますと、これは粒子です。粒子の拡散というのは、非線形という科学になります。我々の流体力学の計算でも最も難しいことになりますが、核燃料というのは、要するに、砂粒みたいなものが合成樹脂みたいなものの中に埋め込まれておられます。これがメルトダウンして放出するとなると、細かい粒子がたくさん放出されるようになります。そうしたものが出てまいりますと、どういふことが起こるかというのが、今回の稲わらの問題です。

例えば、岩手県の藤原町では、稲わら、五万七千ベクレル・プロキログラム、宮城県の大崎一万七千ベクレル・プロキログラム、南相馬市、十万六千ベクレル・プロキログラム、白河市九万七千ベクレル・プロキログラム、茨城県六万四千ベクレル・プロキログラムということで、この数値というのは、決して同心円状にも行かない、どこでどういふふうに落ちているかは、そのときの天候、それから、その物質が、例えば水を吸い上げたかどうか。

それで、今回の場合も、私は、南相馬へ毎週末、七百キロメートル行って、東大のアイソトープセンターは現在まで七回の除染をやっておりますが、南相馬に最初に行ったときには、一台のNaIカウンタ―しかありません。農林省が通達を出したという三月十九日には、食料も水もガソリンも尽きようとして、南相馬市長が痛切な訴えをウエブに流したのは広く知られているところであります。そのような事態の中で通達一枚出しても、だれも見ることができないし、だれも知ることができません。稲わらがそのような危険な状態にあるということは、全く農家には認識されていない。農家は、飼料を外国から買って何十万という負担を負って、さらに、牛にやる水は実際に自分たちと同じ地下水を与えるように、その日から変えています。

そうすると、「我われが、何をやらなければいけないか」というと、まず、汚染地で徹底した測定ができるようにするということを保証しなくてはなりません。我われが五月下旬に行ったときに、先ほど申し上げたように、一台しか南相馬になかったというけれども、実際には米軍から二十台の個人線量計が来ていました。しかし、その英文の解説書を、市役所の教育委員会ではわからなくて、我われが行って教えてあげて、実際に使い出して、初めて二十個の測定報告というのができるようになっている。これが現地の状況です。

そして、先ほどから「食品検査」と言われていますが、「ゲルマニウムカウンタ―」というのでなしに、今日では、「イメージングベースの測定器」というのが、もつとはるかにたくさん半導体で開発されています。なぜ政府は、それを全面的に応用してやろうとして全国につくるためにお金を使わないのか。三か月たってそのようなことが全く行われていないことに、私は満身の

怒りを表明します。

第二番目です。私の専門は、小渕総理のときから内閣府の抗体医薬品の責任者として、今日では、最先端研究支援というので三十億円をかけて、「抗体医薬品にアイソトープをつけて、がんの治療にやる、すなわち、人間の体の中にアイソトープを打ち込む」という仕事が私の仕事ですから、内部被曝問題に関して一番必死に研究しております。

そこで、「内部被曝がどのように起きるか」という問題を説明させていただきます。

「内部被曝」というものの一番大きい問題は、がんです。

がんがなぜ起こるかという点、DNAの切断を行います。ただし、御存じのとおり、DNAというのは二重らせんですから、二重らせんのときには非常に安定的です。これが、細胞分裂をするときは、二重らせんが一本になって、二倍になり、四本になります。この過程のところ、がものすごく危険です。そのために、妊婦の胎児、それから幼い子供、成長期の増殖の盛んな細胞に対しては、放射線障害は非常な危険を持ちます。さらに、大人においても、増殖の盛んな細胞、例えば、放射性物質を与えると、髪の毛、それから貧血、それから腸管上皮、これはいずれも増殖、分裂の盛んな細胞でして、そういうところが放射線障害のイロハになります。

それで、私どもが、「内部に与えた場合に具体的に起こるもの」で知っている事例を挙げます。これは、実際には、一つの遺伝子の変異では、がんは起こりません。最初の放射線のヒットの起こった後に、もう一個の別の要因でがんの変異が起こるということ。これはドライバームューテーションとかパッセンジャーミュテーションとか、細かいことになりましたが、参考の文

献は後ろにつけてあります。それは後で、チエルノブイリの場合や、セシウムの場合を挙げてありますので、それを見ていただきます。

まず、一番有名なのはアルファ線です。「プルトニウムを飲んでも大丈夫」と言う東大教授がいるというのを聞いて、私はびっくりしましたが、アルファ線は、最も危険な物質であります。それは、トロトラスト肝障害という格好で、私も肝臓医は、すごくよく知っております。要するに、「内部被曝」というのは、先ほどから一般的に何ミリシーベルトという形で言われていますが、そういうものは全く意味がありません。I131は甲状腺に集まります。トロトラストは肝臓に集まります。セシウムは尿管上皮、膀胱に集まります。これらの体内の集積点を見なければ、全身を、いくらホール・ボディー・スキャンをやっても、全く意味がありません。トロトラストの場合の、このちょっと小さい数字なので、大きいほうは後で見てもいいんですが、これは、実際にトロトラストというのは造影剤でして、一八九〇年からドイツで用いられ、一九三〇年ごろから日本でも用いられましたが、その後、二十から三十年たつと、肝臓がんが二五%から三〇%に起こるということがわかってまいりました。

「最初のものが出てくるまで二十年」というのは、なぜかというと、最初に、このトロトラスト、アルファ線核種なんです、アルファ線は近隣の細胞を傷害します。そのときに、一番やられるのはp53という遺伝子です。

我々は今、ゲノム科学というもので人の遺伝子を全部配列を知っていますが、一人の人間と別の人間は、大体三百万か所違います。ですから、人間を同じとしてやるような処理は、今日

では全く意味がありません。いわゆるパーソナライズド・メディスンと言われるやり方で、放射線の内部障害を見るときにも、どの遺伝子がやられてどういうふうな変化が起こっているかということを見ることが、原則的な考え方として大事です。

トトロラストの場合は、第一段階ではp53遺伝子がやられて、それに続く第二、第三の変異が起こるのが二十から三十年かかり、そこで肝臓がんや白血病が起こってくるということが証明されております。

次に、ヨウ素131。ヨウ素は、ご存じのとおり甲状腺に集まりますが、甲状腺への集積は成長期の甲状腺形成期が最も特徴的であり、小児に起こります。しかしながら、一九九一年に、最初、ウクライナの学者が甲状腺がんが多発しているというときに、日本やアメリカの研究者は、ネイチャーに、これは因果関係がわからないということを投稿しております。

なぜそう言ったかというところ、「一九八六年以前のデータがないから統計学的に有意だということと言えない」ということです。

しかし、「統計学的に有意」ということがわかったのは、先ほども長瀧先生からお話がありました。二十年後です。二十年後に何がわかったかというと、八六年から起こったピークが消えたために、これは過去のデータがなくても因果関係があるということが明確になった。

ですから、いわゆる疫学的な証明というのは非常に難しく、全部の事例が終わるまで、大抵証明できないです。ですから、いま我われに求められている子供を守るという観点からは、全く違った方法が求められます。

そこで、いま行われているのは、国立のバイオアッセイ研究センターという、化学物質の効果を見る福島昭治先生という方が、ずっとチエルノブイリの尿路系に集まるものを、検討されています。

福島先生たちがウクライナの医師と集めて、五百例以上の、前立腺肥大の手術をしますと、膀胱もとれてきます。これを見まして検討したところ、高濃度汚染地区、尿中に六ベクレル・パー・リッターという、微量ですが、その地域ではP53の変異が非常にふえていて、しかも、増殖性の前がん状態、我われから見ますとP38というMAPキナーゼと、NFkBというシグナルが活性化されているんですが、それによる増殖性の膀胱炎というのが必発でありまして、かなりの率で上皮内のがんができていくということが報告されております。

それで、この量に愕然といたしましたのは、「福島之母親の母乳から、二から十三ベクレル、七名で検出されている」ということが既に報告されていることであります。

我われアイソトープ総合センターでは、現在まで毎週、七百キロメートル、大体一回、四人ずつの所員を派遣しまして、南相馬市の除染に協力しております。南相馬でも起こっていることは全くそうでした、二十キロ―三十キロ圏という分け方は全然意味がなくて、幼稚園ごとに細かくはかかっていかないと全然だめです。

それで、現在、二十キロから三十キロ圏にバスを仕立てて千七百人の子供が行っていますが、実際には、南相馬の中心地区は海側で、学校の七割は比較的線量が低いのです。

ところが、三十キロ以遠の飯館村へ近い方の学校に、スクールバスで毎日百万円かけて子供が

強制的に移動させられています。このような事態は一刻も早くやめさせてください。

今、その一番の障害になっているのは、強制避難でないと補償しないこと。参議院のこの前の委員会で、当時の東電の清水社長と海江田経済産業大臣がそういう答弁を行なっておりますが、これは分けてください。補償問題と、線引きの問題と、子供の問題は、直ちに分けてください。子供を守るために全力を尽くすことを、ぜひお願いします。

それからもう一つは、現地でやっていますと、「除染」というものの「緊急避難的除染」と「恒久的除染」をはっきり分けて考えていただきたい。緊急避難的除染を我われも、かなりやっております。

例えば、ここの図表に出ております滑り台の下。滑り台の下は、ちっちゃい子が手をつくところですが、この滑り台に雨水がざあっと流れてきますと、毎回濃縮します。右側と左側とずれがあつて、片側に集まっていますと、平均線量一マイクロのところだと十マイクロ以上の線量が出てきます。それで、こういうところの除染は、緊急にどんどんやらなくてはいけません。それから、こういうさまざまなコケが生えているような雨どいの下、これも実際に子供が手をついたりしているところなんです、そういうところは、例えば高压洗浄機を持っていってコケを払うと、二マイクロシーベルトが〇・五マイクロシーベルトまでになります。けれども、〇・五マイクロシーベルト以下にするのは非常に難しいです。それは、建物すべて、樹木すべて、地域すべてが汚染されていますと、空間線量として、一カ所だけを洗っても全体をやることは非常に難しいです。

ですから、除染を本当にやるというときに、いったいどれくらいの問題があり、どれくらいのコストがかかるか、イタイイタイ病の一例を挙げますと、カドミウム汚染地域は、大体三千ヘクタールなんです、そのうち千五百ヘクタールまで、現在、除染の国費が八千億円投入されています。もしこの千倍ということになれば、一体どれほどの国費の投入が必要になるのか。ですから、私は、四つのことを緊急に提案したいと思います。

第一番目に、国策として、食品、土壌、水を、日本が持っている最新鋭のイメージングや何かを用いた機器を用いて、イメージ化して(半導体のイメージ化は簡単です)、流れ作業にして、シャットしてやるということで、最新鋭の機器を投入して、抜本的に改善してください。これは、今の日本の科学技術力で全く可能です。

二番目。緊急に、子供の被曝を減少させるために、新しい法律を制定してください。

私の現在やっているのは、すべて法律違反です。現在の障害防止法では、各施設で扱える放射線量、核種などは決められています。東大の二十七のいろいろなセンターを動員して、現在南相馬の支援を行なっていますが、多くの施設はセシウムの使用権限や何かは得ておりません。車で運搬するのも違反です。しかしながら、お母さんや先生たちに高線量のことを渡してくるわけにはいきませんから、今の東大の除染では、すべてのものをドラム缶に詰めて東京へ持って帰ってきております。受け入れも法律違反。すべて法律違反です。

このような状態を放置しているのは、国会の責任であります。全国には、例えば国立大学の

アイソトープセンターというのは、ゲルマニウムをはじめ、最新鋭の機器を持っているところは、たくさんあります。そういうところが手足を縛られたままで、どうやって、国民の総力を挙げて子供が守れるでしょうか。これは国会の完全なる怠慢であります。

第三番目。国策として、土壤汚染を除染する技術を、民間の力を結集してください。

これは、例えば、東レだとかクリタだとか、さまざまな化学メーカー、千代田テクノルだとかアトックスというような放射線除去メーカー、それから竹中工務店などさまざまなところは、放射線の除染などに対してさまざまなノウハウを持っています。こういうものを結集して、現地に直ちに除染研究センターをつくってください。

実際に何十兆円という国費がかかるのを、今だと利権絡みの公共事業になりかねない危惧を私はすごく持っております。国の財政事情を考えたら、そんな余裕は、一瞬ありません。

どうやって除染を本当にやるか。七万人の人が自宅を離れてさまよっているときに、国会はいつたい何をやっているのですか。

(原文のまま)

子どもの安全な場所での教育を求める

ふくしま集団疎開裁判の会

東日本大震災後次つぎに事故を起こした東電福島原子力発電所は、放射能を空に海に放出し、三か月過ぎる今でも、いつ終息するかわかりません。郡山で私たちは、1時間あたり1.2〜1.3マイクロシーベルトの空中放射線量の中で、被曝を気にしながら生活をしています。特に放射線の影響を受けやすい、未来ある子どもたちへの影響を心配しています。福島県では、すでに自主避難などで、福島を離れている子どもたちもいます。しかし、依然、大多数の子どもたちと親は、行政が実施している安全宣伝と危険性を伝える情報に翻弄され、意識の格差や友だちと別れたくない、経済的負担等々で思い悩み、不安な日々を送っています。自主避難をしたくてもできない家庭も多く、避難するか否かを各家庭の判断に任せるべきではないと考えます。今回、14人の勇気ある原告が、郡山市を相手に、「1^{mSv}/年以下の安全な場所で教育を実施することを求める仮処分」を申し立てました。そして第1回の裁判（審尋）が7月5日に決まりました。

福島集団疎開裁判 7月19日第2回裁判（第1回審尋）の報告

第1回の審尋が7月19日午後4時30分から、福島地方裁判所郡山支部で開かれました。

債権者(申立人)は、債権者親権者5名と代理人弁護士3名が出席し、相手方である郡山市側は、代理人弁護士2名が出席しました。当方からは前回以降新たに集まった5000近くの署名を提出しました。

郡山市から当方の申立書に対する答弁書が提出されました。その内容は、「以下の理由などから、訴えの却下を求める」というものです。

①申立書記載の「請求の趣旨」は、抽象的である。

②請求の趣旨に記載された措置は、公権力の行使そのものに該当する行為を求めている、民事保全法上の仮処分は認められない。

③郡山市内において教育活動を実施すること自体に起因して、児童生徒の健康にどのような影響が生じるか明らかでなく、保全の必要性がない。

④債務者は年間1ミリシーベルト以下を目指すため表土除去工事・校舎周辺の除染活動・屋外活動の時間制限などの放射線量軽減化措置をとっており、被曝線量が軽減化されているから、保全の必要性・緊急性が認められない。

しかしながら、申立人の主張する請求の趣旨は十分具体的であり、また申立人らの提示する申立の趣旨は、あくまで債権者個別の疎開措置であって、申立の趣旨自体で集団疎開を求めているわけではなく(認容決定を受けて、事実上郡山市が集団疎開を決定することを期待はしておりますが)、その点で相手方(郡山市)の主張は当を得ないものであります。ただ、この点についての誤解が生じ

ないよう、申立の趣旨の一部の訂正をしたいと考えております。

それを受けて相手方(郡山市)が上記答弁書の主張を見直し、再度主張を整理することとなります。そして、その上で当方から上記主張に対する反論をすることになります。

答弁書によって郡山市の姿勢は明らかになりました。それは、門前払いを狙うことと、既に郡山市の行なっている措置は十分なものであり疎開させる必要性がないというものです。しかしながら、現実には郡山市における空間線量は年間1ミリシーベルトに達するレベルが継続しており、実際に健康被害も生じ始めているのですから、その主張は空虚なものといわざるを得ません。

郡山市の真摯な対応を引き出すべく、効果的な反論を加える必要があります。

次回の審尋期日は8月26日午後4時30分から開かれ、次々回の審尋期日は9月9日午後4時40分から開かれる予定です。

引き続き、裁判へのご注目と応援を宜しくお願いいたします。

連絡先 ふくしま集団疎開裁判の会

代表 井上 利男 (024・954・7478)

子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク

国、県への対応部会

世話人 駒崎ゆき子 (090・2608・7894)

左記の署名用紙はA4に拡大のうえ、ご使用下さい。

署名用紙PDF <http://1am.sakurane.jp/Nuclear/Signature.pdf>

子どもたちを福島原発事故による被ばくから守るため 集団疎開を認める決定を求める署名

福島地方裁判所郡山支部 裁判官 殿

福島原発事故から数ヶ月が立ちますが、収束を迎える日は遠く、私たちは日々被ばくの不安と戦いながら生活しています。特に、私たちは、放射線の影響を受けやすい、未来ある子どもたちへの影響を心配しています。

年間1ミリシーベルトは、国際放射線防護委員会（ICRP）が一般公衆の線量限度として定めるところであり、日本の法律でも、原子力発電所が一般公衆に対し、年間1ミリシーベルト以上を超える被曝をさせないことを求めています。しかし、郡山市をはじめとする福島県内の子供たちの多くは、福島原発事故によって、すでに外部被曝だけでも1ミリシーベルトを超える被曝をしているか、確実に1年に1ミリシーベルトを超える環境下で生活しています。

福島県では、すでに、かなりの数の子どもたちが、自主避難するなどして福島の地を離れています。しかし、依然、大多数の子どもたちと親とは、行政が実施している安全宣伝と危険性を伝える情報、先生や友だちと別れたくないという思い、自主避難する場合の経済的負担等で思い悩み、不安な日々を送っています。自主避難をしたくてもできない家庭も多く、避難するか否かを各家庭の判断に任せるべきではないと考えます。

子どもたちの生命・健康という、この国にとって一番の宝を守ろうとしない国には未来はありません。いま、行政は、速やかに学校ごと疎開するという決断をすべきです。

裁判官におかれましては、是非とも、私たちの悲痛な思いを汲み取った決定をすみやかに下していただくようお願いいたします。

氏名	住所	コメント

*取扱団体 ふくしま集団疎開裁判の会

(送付先 〒390-0861 長野県松本市蟻ヶ崎 1-3-7 安藤法律事務所

FAX 0263-39-0700、メール添付 m-ando@po.mcci.or.jp

or FAX 049-222-8780、メール添付 syomei@song-deborah.com)

*なお、本署名は裁判所提出のみの用途に用い、それ以外の用途に用いません。

*コメントについて、欄が足りない場合は別紙に記載して添付してもらっても構いません。

被曝対策が不十分である これだけの理由

竹野内 真理

1999年より反原発運動、特に「地震と原発」問題で活動してきました竹野内と申します。3月11日の福島原発事故を未然に防ぐことができなかったことは、無念で、悲しくてなりません。そしてさらなる一番のショックが、今現在も、市民、特に子どもたちへの放射能被曝への対応が、あまりにも不十分であるという現実です。このままでは、子どもたち、そして未来世代の命や健康に多大な影響がもたらされてしまうことを危惧しております。

そこで、まずは現行の放射線防護において、いかに低線量内部被曝が考慮されていないかを以下の5点にまとめさせていただきました。不十分な対応をしている行政や、学校関係者の方がたにも、広めていただければ幸いです。

1 外部被曝と内部被曝を混同し、リスクの過小評価

最近、環境中のホットスポットは注目されるようになっていますが、依然として、体内のホ

ットスポットが、十分注目されていません。そのようななか、先日、欧州放射線リスク委員会（ECRR）原子力産業の利害に関係のない独立系の研究者が世界各国から集結した組織）、の科学事務局長クリス・バズビー氏が、内部被曝の危険性について、絶妙な比喻を使って、表現しました。

「内部被曝の危険性は、暖炉の前で暖まることと、その暖炉の中にある炭火を口の中に入れるのとでは、体に対する影響がまったく異なることと同じ原理である。」

体内に取り込まれた飛距離の短いアルファ線、ベータ線は、特に危険です。飛距離が短い分、周辺の細胞に継続的に影響を及ぼすからです。そして、あまりマスコミで言われませんが、ガイガーカウンターやホールボディーカウンターでは内部被曝は計測できないことも、根本的な問題です。

2 日本政府がよづいんをうてゐる——ICRP（国際放射線防護委員会）基準自体が問題

「TVなどのマスコミによく出てくる専門家の意見が、安全を過小評価しているのではないか」という不安を持つお母さんたちは多いと思います。そういう声に対して、体制側から必ず出てくるのが、「ICRP（国際放射線防護委員会）の基準に準じているので信頼できる。」という回答です。まるで水戸黄門の印籠のように使われる「ICRP基準」。果たして本当に信頼に足るものなのでしょうか。

2009年、ICRPの科学事務局長を20年務めたJack Valentin博士は、「内部被曝による被曝は数百倍も過小評価されている可能性があるため、ICRPモデルを原発事故に使用することはもはやできない。また、体制側にある放射線防護機関は、チェルノブイリリスクモデルを見ておらず、誤った評価をしている」と言明したそうです。ICRPのトップが、退職後に、このように暴露したこの事件は、非常に重大です。この会見は、ビデオテープに記録されていますので (<http://vimeo.com/15398081>)、ぜひ、ご覧ください。

そもそも発足してすぐに、内部被曝に関するリスク評価委員会を廃止してしまったICRP。「ICRPが歴史的に原子力産業から経済的にも支援を受け、原子力を推進するために基準値を策定してきたこと。放射線の危険性がより高いものだとかわかってきても、相変わらず危険な基準値をごまかして使用している」ということは、肥田舜太郎氏と共訳しました「人間と環境への低レベル放射能の脅威」でも、詳述されておりますので、ご参考ください。

3 100ミリシーベルト以下でも健康に被害はある

「100ミリシーベルト以下であれば健康に被害はない」、さらには、「妊婦や子どもでも大丈夫」と主張する専門家がいくつしゃり、また、そのような書籍もたくさん出ています。このような「リスクはない」あるいは「検知できないほど少ない」、という(往々にして立派な肩書のついた)専門家の意見を信じて行動していたら、最も大事である子どもたちへの健康被

害が増大してしまいます。低線量の被曝で、上に凸の曲線を描いて影響が高まる事象は、「ベトカウ効果」として知られていますが、今では広く認知され、「逆線量率効果」という専門用語にもなっています。海外の多くの研究でも明らかにされており、これは先述の「人間と環境への低レベル放射能の脅威」で詳述されているのですが、なにもこれは、独立系の科学者たちだけが主張しているわけではありません。

体制側である放射線医学総合研究所編著の「虎の巻 低線量放射線と健康影響——先生、放射線を浴びても大丈夫?と聞かれたら」でも、この逆線量率効果については明記されているのです。ちなみにこの本の中には、上に凸のグラフが3か所も用いられています。「最近発達している分子生物学的な知見により、低線量でも影響が急激に高まり危険である可能性がある」という研究は、すでに体制側にも浸透している科学的な事実なのです。ぜひ、ごらんください。疫学的にも、2005年に15か国の被曝労働者を対象にしたWHO国際がん研究機関で行われた調査で、「10ミリシーベルトでもがんのリスクが有意に検出されたと結論された」という引用もあります。

この本は非常に不思議な本で、後半の、より専門的なページには、上記のようにリスクがきちんと引用されているのに、最初のほうの、より大衆的なカラーのページには、「100ミリシーベルト以下の放射線の影響は、検出できないくらい小さい」と書いてあるのです。

このような姿勢は、昨今マスコミに出てくる専門家にも見られるようです。例えば福島県立医科大学副学長に就任した山下俊一氏は、医師向けの文書では「10〜100ミリシーベルトの

間で発がんのリスクを否定できない」と書いていたにもかかわらず、福島県民には「100ミリシーベルトまでは妊婦も安全」と繰り返して説明したそうです。

このような二枚舌に、市民はだまされてはならないし、何よりもこのような発言は、「私たちと子どもたちの将来の命と健康に直結する」のですから、非常に問題のある犯罪的な発言だと思っています。

4 それぞれの核種の毒性が語られていない

もうひとつ、決定的な問題があります。「個々の核種についての毒性」が語られていないことです。

例えば、セシウムについては、「筋肉に蓄積し、ヨウ素が甲状腺に溜まるのとは裏腹に、体全体に均一に散らばるので、たいした影響は見られない」ようなことを言う専門家も、いらっしやいました。

しかし、私は先日、大変な書物に出会いました。茨城大学名誉教授久保田護氏が訳した、バングラデフスキー著『人体に入った放射性セシウムの医学的・生物学的影響』（自費出版問合せ先：0294-362104）です。

チェルノブイリ事故で死亡した患者の解剖までして研究をした博士によれば、「セシウムは、心臓、腎臓、肝臓、免疫系、生殖系、消化器系、ホルモン系など、さまざまな影響がある」と

いうのです。「セシウムは尿から排出されるから大丈夫」という専門家もいらつしやいますが、ゴメリでは、「突然死の90%近くがセシウムによる腎臓破壊を伴っていた」と言います。心臓への影響も非常に重大で、ミンスクでは「体内放射能が検出されない場合でも、子どもの4人に1人が心電図に変化が見られた」といいます。甲状腺がんにも、ヨウ素と相乗効果を持つて寄与すると言いますし、「胎児の肝臓病や幼児の高血圧、子どもの慢性胃腸炎まで引き起こす」と言います。生殖系にも「月経サイクルの不調や初期流産の原因ともなる」とされ、大変な影響があるのです。

もうひとつ、福島原発から80kmで発見されたストロンチウム90も、「骨髓に達して白血球の機能を阻害し、ガン、免疫低下を引き起こす」ので、あらゆる病気の原因となります。

さらに娘核種であるイットリウムは、「すい臓に蓄積して糖尿病を引き起こす」ほか、「脳下垂体にも蓄積し、妊娠後期における胎児の肺機能の成長を阻害し、呼吸器疾患で突然死となる可能性がある」というのです（「人間と環境への低レベル放射能の脅威」参照）。これら核種による人体への影響は、非常に重大であるにもかかわらず、マスコミで報道されませんし、残念なことに、医師でも知らない方が多いと思います。海外の研究に基づくこれらの知見は、市民の間で早急に知らしめ、子どもたちや将来の世代を守らねばなりません。

5 世界的に見て高すぎる基準値

「基準値以下だから大丈夫」という考え方も、非常に危険です。基準そのものが、怪しいものであることは前述しましたが、基準値の値も、世界的に見て、日本のものは異常に高いのです。例えば、乳児の飲料水の基準値は1000ベクレルですが、これは国際法におけるヨウ素の原発の排水基準値より2倍以上高いものであり、アメリカの法令基準の約1000倍、WHOやベラルーシのセシウム基準値の10倍にあたります。また、野菜中のセシウム137の500ベクレルという基準値も、ウクライナの10倍以上です。

このように高い値を設定し、将来子どもたちに健康被害が現れてしまったら、どうするのでしょうか。

「がんばれ、日本!」の掛け声のもと、毒物を、子どもを含む、国民皆で分け合い、日本の将来を台無しにする事態は、なんとしても避けねばなりません。農家の方や、水産業者、飲食関連業者の方がたは、もちろん、国で責任を持って長期的に保障をすべきですが、彼らを救済する名目で、このような高い基準値を設定してしまつては、健康被害により国の将来は、なくなつてしまうでしょう。また、個人やその家族における健康被害の苦しみは、お金に換えられない問題であることは言うまでもありません。

未来に向けて

今まで見てきたとおり、日本政府の被曝に対する対応が、いかに、いいかげんで不十分なもの

かが、お分かりいただけたかと思えます。この現状を開示するには、情報を得た市民一人ひとりが声を上げ、マスコミも、(御用)科学者たちも、政府上層部も、動かすしかないのです。

私は「あごろ」286号でも書いたのですが、このことを、実は知り合いの知り合いであったIAEAの職員の方に言われたことがあります。ウィーンにあるIAEAに浜岡原発と東海地震の危険性を単独で直訴に行った2002年のことでした。その方は地震と原発について、こう言われたのです。「竹野内さん、この問題はね、問題が大きすぎて誰も手がつけられないんだ。仮に日本で大事故があつて500万人死んでも、あきらめるしかない。」

私が「それでもまだ事故は起きていないのだし、なんとか手立てはないものか」と食い下がったところ、彼は、こう言ったのです。「日本の国民全員が脱原発を望まなければ無理でしょう」と。

ですから、この問題は、本当に国民一人ひとりが自分自身の問題と捉え、真剣に声を上げねばならない問題なのです。それも早急に、です。なんといつても福島4号炉は、運転中でないにもかかわらず、大事故を起こしました。ですから、原発を止めるだけでも実は不十分です。もちろん再稼動というのはナンセンスであり、さらには、止めてある原発も、使用済み核燃料のあるところは、新たに大地震が発生しても事故が起らないように早急に手段を講じるべきです。今現在、原発の何十機分の放射能が溜め込まれている青森県六ヶ所村の再処理工場などは、その最たる施設でしょう。

1945年、広島、長崎で日本は尊い命を多く失い、1954年には水爆によるビキニ事件

が起き、その直後に「毒をもって毒を制す」という政策で、日本のマスコミや政治家も共謀して、米国から原発が導入されていきました。結果、日常的な被曝労働者の健康被害に加え、福島原発事故による広範な放射能汚染の災禍に見舞われています。私たちは、今度こそ、本当の意味で放射能の危険性に目覚め、核兵器はもろろん、原子力発電もなくし、今ある放射性物質の拡散を防ぐという、世界に向けて、命を守るために最も大事なメッセージを発する使命があると思っています。それによつてのみ、私たちが現在進行形で被っている被害を最小限に食い止め、さらには未来に向けて、被害の教訓をプラスに転換することができると思います。

（人間と環境への低レベル放射能の脅威」翻訳者）

1967年生まれ。東京学芸大教育学部英語科卒、通訳者、フリーライター。元原子力資料情報室国際担当。東京のたんぼ舎にて脱原発国際ネットワーク名 (http://www.tanpoposyane/form_ji/form.php) をしているほか、現在は沖縄在住で、「放射線防衛プロジェクト沖縄」、「子供を放射能から守る会おきなわ」、「やんばる共生プロジェクト」の手伝いもしている。共訳書に『低線量内部被曝の脅威』（緑風出版、2011年4月）、「人間と環境への低レベル放射能の脅威」（あけび書房、2011年6月）。近日中に『原発閉鎖が子供を救う（仮題）』（緑風出版）を出版予定。一歳児の息子を持つシングルマザーでもある。

Eメール：mariscontact@gmail.com（本の注文はこのメールでも可能です。）

フェイスブック：http://facebook.com/mariscontact

進行する首都圏の放射能汚染とその影響

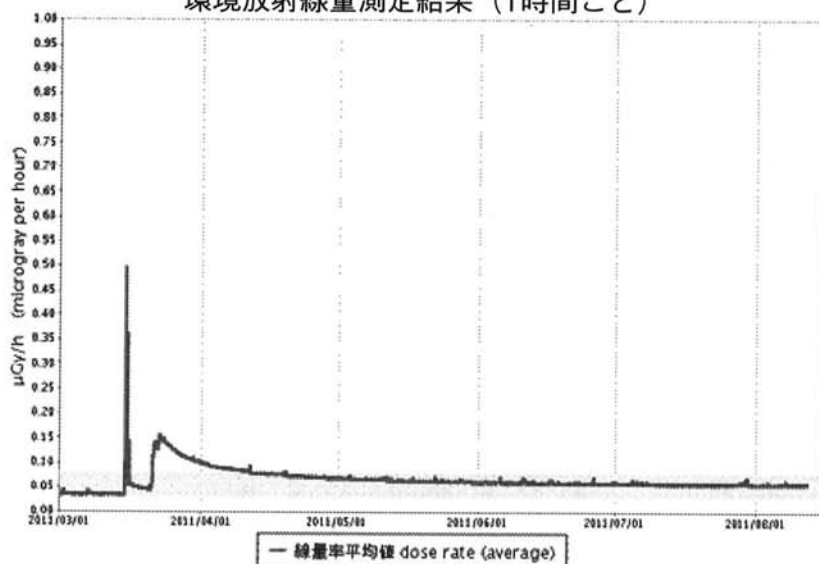
日置雅晴

福島第一原発の事故による放射能汚染の拡大は、詳細な測定データなどが明らかになるにつれ、その深さが徐々に明らかになってきた。事故直後には多くの学者や評論家などがマスコミなどを通じて、「放射能の放出はない。あっても少量である」という趣旨のことを語っていたが、事実の判明とともに、彼らは今やどこかに行ってしまったようだ。

しかし、初期の「首都圏などには影響がない」というような報道、それから「公表される空間線量が福島県やその近辺を除いては事故前と大差がない」という数値だけを見ていると、未だに多くの人たちは「少なくとも首都圏にはたいした影響がなかった」と思っているかのようだ。しかし、現実突きつけられる様々なデータは、想像以上の汚染が首都圏を含む広範囲に拡大していることを物語っている。

ここでは、首都圏の汚染の実情がどの程度のものなのか、それが今後どのような問題を引き起こすのかという点を考察するが、その趣旨は、福島第一原発から200キロほど離れている首都圏の汚染状況を理解することにより、事故の際の原発被害の甚大さを理解することにある。

環境放射線量測定結果（1時間ごと）



首都圏汚染の実態

東京を例にとると、行政の公表している空間放射線レベル（*1）は、事故直後に一瞬0・5 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ （マイクローシーベルト/時間）を記録したものの、その後ほぼ0・1 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ を超えておらず、事故前（おおよそ0・05 $\mu\text{Sv}/\text{h}$ 前後）と大差がなく、これは千葉や神奈川の測定結果も同様であり、これを見ていると首都圏は放射能汚染を免れているかのように思える。

しかし、地域に降下した放射性物質量と、それにより引き起こされる土壤汚染の実態に着目すると、違った様子が判明する。

政府の公式発表（*2）によっても、3月の放射性物質降下量は、東京（ヨウ素131が29000、セシウム134が8500、セシウム137が8100（ Bq/m^2 ）（ベクレル）、千葉（同20000、4400、4900）、神奈川

(茅ヶ崎) (同10000、3500、3400)、さいたま(同24000、5400、5300)と、軒並み高濃度の放射性物質の降下が記録されている。

実際には、降下した放射性物質は、均質に分布するのではなく、都市部では高層ビルにぶつかりその近くに降下したり、雨が降った地点にまとまって降下したり、その後の降雨により植え込みなどに集中したりするので、どうしても濃淡が生じる。

市民団体の実際の土壌調査(*3)によると、事故からの時間の経過により、ヨウ素はほとんど検出されていないが、セシウム(134及び137の合計)は、都内で最も高いところで24万Bq/m²が測定され、多くの地点で数万Bq/m²が報告されている。特に千葉県の東葛地域はホットスポットと言われているが、この地域では、高いところで45万Bq/m²、多くの地点で10万Bq/m²をこえる汚染が報告されている。

これがどの程度のレベルかを考える一つの参考が、チェルノブイリにおける汚染値の区分の基準である。チェルノブイリでは土壌のセシウム137の濃度を基準として4つの管理区分がもうけられた。平方キロあたり40キュリー以上、15キュリー以上、5キュリー以上、1キュリー以上を基準としてランク1から4とし、ランク1は強制避難ゾーン、ランク2は強制移住ゾーン、ランク3は希望すれば移住可能なゾーン、ランク4は放射能管理ゾーンとされている。(*4)

キュリーは、以前使われていた放射エネルギーの単位で、現在使われているBqに置き換えると、それぞれ148万Bq/m²、55・5万Bq/m²、18・5万Bq/m²、3・7万Bq/m²となる。

地域全体の降下量から見ると、首都圏はチェルノブイリの管理区域より多少低いとは言えそうだが、現実の土壤汚染は、ランク4はもとよりランク3に該当するレベルの場所が結構生じているのである。特にランク3に該当している地域では、ロシアでは移住まで認められていると言うことを踏まえた、早期適切な対策の実施が望まれるし、ランク4相当の地域でも、除染の実施など可能な施策の早期実施が望まれるが、首都圏の放射能汚染に関しては一部自治体の自主的対応は別として、政府は今までのところ何らの対策をも講じていないのである。

過去の大気圏内核実験による汚染との比較

今回の事故による放射能汚染が、過去の大気圏内核実験時に生じた放射能汚染と比べてどの程度のものかも、気になる点と言えよう。

1945年に始まった核兵器の実用化、開発競争に伴い大気圏内核実験が行われ、その影響で全世界の放射性物質降下量は増大したが、1962年に米ソの大気圏内核実験が中止されたことから、1963年をピークとして、減少に転じた。

大気圏内核実験による放射能汚染(セシウム137)については、「わが国におけるフォールアウト90 Sr (ストロンチウム90) の1980年末までの積算降下量は、秋田が最高で、約150 mCi/km² (ミリキュリー/平方キロメートル)、最低は大阪で、約57 mCi/km²、6地点の平均値は約92 mCi/km²である。」(*)とされている。

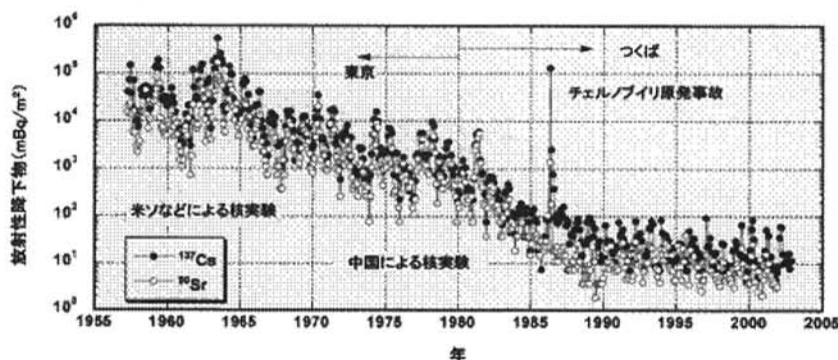


図1 人口放射性降下物の経年変化

【出所】気象研究所地球化学研究部：環境における人口放射能の研究2003、
http://www.mri-jma.go.jp/Dep/go/2003Artifi_Radio_report/coverJP.htm

92 mCi/km²をBqに換算すると3404 Bq/m²相当である。

これは、長年のトータルの降下量であり、ある時期の降下量は、グラフに示されているように、ピークの63年頃で、東京で500 Bq/m²程度であったと考えられる。(※6)

今回の事故による東京の降下量は、政府公表数字でも上述のように8100 Bq/m²（セシウム137）であり、核実験のピーク時の16倍程度という結果となる。（セシウム137も入れると30倍程度）

近年の放射性降下物が、概ね0.1～0.01 Bq/m²程度であったことを考えると、大気圏内核実験のピーク時には、その5000倍から5万倍の放射性物質の降下量があったことになる。これ自体今更ながら驚くべき数字ではあるが、今回の事故は東京にその核実

験のピーク時のさらに数十倍のレベルの放射性物質を降下させていると言うことができる。きわめて憂慮すべき実情と言えるだろう。

放射性物質問題で破綻する 首都圏の生活インフラ

現実には、かなり厳しい数値が出ている首都圏の放射能汚染であるが、そのツケは、下水処理場やゴミ処理場にまわっている。降下した放射性物質はその後の雨などで下水に流れ込み、下水処理場で処理される際に下水汚泥に吸着され集積される。草や樹木などに付着した放射性物質やゴミに付着した放射性物質はゴミ処理場に搬入され、これが焼却処理される場合、焼却灰や集塵機に集積される。

たとえば都内の下水処理場からは、汚泥から最高 1890 Bq/kg 、汚泥の焼却灰からは最高 46000 Bq/kg ものセシウム(134 と 137 合計)が検出されている(*7)し、清掃工場では主灰(燃えがら)から最高で 1290 Bq/kg 、飛灰から、最高 9740 Bq/kg のセシウム(同)が検出されている。(*8)

首都圏からは、どこの都・県でも、概ね似たような結果が報告されている。(当然ながら、福島県では、さらに桁の違う放射線量が測定されている)

「この濃度がどの程度か」ということを考えるために、原子力発電所などから平常時に廃棄される廃棄物の基準を見ると、廃棄物を通常廃棄物とするか、放射性廃棄物とするかの判断

基準として、いわゆる核廃棄物のクリアランスレベル^(*)が定められているが、これは、セシウムについては 100 Bq/kg とされており、これを超える放射性物質を含有するものは、放射性廃棄物としての特別の管理が必要とされ、低レベル放射性廃棄物保管施設に放射線レベルが低下するまで保管することとされていた。この基準の設定は、「国際放射線防護委員会（ICRP）の勧告等に基づいて、クリアランスされたものによる線量のめやす値を、自然界の放射線レベルに比較して十分小さく、また、人の健康に対するリスクが無視できるものとして、 $10\text{ }\mu\text{Sv/年}$ （ 0.01 mSv/年 ）に設定しています。」という考え方で設置された数値であるが、今や首都圏のほとんどの物質は、クリアランスレベルを超えている可能性がある。

このような放射性の廃棄物に関する法的に最大の問題は、これまでの日本の法体系は、「原子力事業者だけが放射性廃棄物を排出する可能性がある」として、これに対して上記のような厳格な規制を適用してきたが、「一般人や行政機関が放射性廃棄物を排出する」などということは、想定されておらず、法体系上も、全く規定が欠落していることである。廃掃法では、放射性廃棄物は対象とされていないことから、放射能を帯びたゴミを投棄したり、勝手に処分しても、廃掃法違反として処罰ができないこととなる。原子力事業者以外が放射性廃棄物を運搬したり処分したりすることは全く想定されていないので、当然何らの規制基準も存在していない。

その結果、放射能が検出された下水汚泥や焼却灰などは、適法な処理ができないこととなり、当面、処理施設に保管することとしている自治体が、ほとんどであるが、下水処理場や清掃工場に何万トンと汚泥や焼却灰がたまりだしている。これが大量に集積されると、それ自体が相当

量の放射線を出す二次汚染が発生してしまうことになる。処理施設で働く労働者や、施設近隣住民への影響も心配される。さらに焼却に伴う大気への再発散の恐れなども想定される。

このような放射性廃棄物が現実に大量に発生していることから、政府としても処理方針を定め、一定レベル以下は管理型処分場などへの埋却を可能とする方針とされているが、その処分場所を巡っては、当然ながら地域住民との紛争が予想され、現実的な処理の遂行は容易ではない。首都圏でも汚染度の高い、いわゆるホットスポットでは、早期に適切な除染作業をすることがトータルの被曝量を下げる点からは望ましいが、除染作業で生じた汚染土壌や除染した水、刈り取った草木などは、それ自体放射性廃棄物であり、除染すればするほど、処理困難な廃棄物が増えることとなる。

このような問題一つとってみても、放射性廃棄物の処理体系を抜本的に改正しないと、問題は解決できないことが明らかである。（*10）

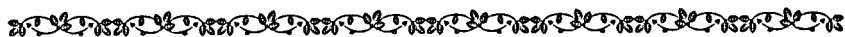
今回の事故は、「事故はあり得ない」として、原子力事故に対する法体系も、対応体制も、一切整備を怠ってきた日本の原子力体制の問題点を、一挙に現実化させた。

現実に日々発生する大量の放射性廃棄物の処理という、避けて通れない問題が、すべての市民、自治体に突きつけられているのが首都圏の実態であり、汚染の実情であること、福島の実態は、さらにそれより何十倍も厳しいことを意識して、今一度、認識する必要がある。

（弁護士／早稲田大学大学院法務研究科教授）

（日弁連災害対策本部原子力問題PT委員）

- *1 http://monitoring.tokyo-eiken.go.jp/mon_air.html 東京都健康安全研究センター測定による環境放射線測定値グラフ
- *2 http://www.mext.go.jp/component/english/_icsFiles/afieldfile/2011/07/29/1307873_072914.pdf 公表数値は Bq/m^2 平方キロだが、これは Bq/m と同じになる
- *3 <http://docradiationdefense.jp/doiyou1.pdf> 実測は土壌の kg あたり放射性物質量を測定してこれを65倍して m あたり放射性物質量と換算している。
- *4 <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/seminar/No102/imanaka060414.pdf>
- *5 http://www.rist.or.jp/atomica/data/dat_detail.php?Title_No=09-01-01-05
- *6 http://www.mri-jma.go.jp/Dep/ge/2009Artifi_Radio_report/Artificial%20Radionuclides%20in%20the%20Environment%202009.pdf (このグラフの単位は Bq なので注意が必要)
- *7 <http://www.gesui.metro.tokyo.jp/oshi/inf0521.htm> 東京都下水道局6月17日発表による
- *8 <http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2011/06/DATA/2016s200.pdf> 東京都清掃局6月27日発表データ
- *9 <http://www.nsc.go.jp/haiki/page5.htm>
- *10 http://www.nichibenren.or.jp/activity/document/opinion/year/2011/110729_2.html 日弁連 放射能による環境汚染と放射性廃棄物の対策についての意見書



いのち

堀場 清子

コップにいっぱいの水を注ぐ
透明な きれいな水
そのなかに 毒がある
放射能という名の〈毒〉が

まいにち

水を飲まずには 生きていけない

〈毒〉とともに

呼吸せずには 生きていけない

〈毒〉の混じった空気を 吸いながら

土も野菜も原乳も海草も魚も すでに汚染された
背筋も凍る食物連鎖が スタートした



それらを

食わずには生きていけない

原子力発電所は危ないと

心あるひとはみな 憂慮してきた

事故があれば

どれほどの大惨事がおきるかと

的中——というにも酷すぎるカタストロフィ

窮極の不幸において

福島第一原子力発電所でそれが実現した

半世紀にわたり

自民党政権は原子力政策を推進してきた

民主党政権もそれを継承した

すでに五四基の原発が全国で稼動していた

安全より利潤をむさぼる電力会社と



癒着する経済産業省 文部科学省

それにぶらさがる原子力安全・保安院は

まさに監督すべき危機に瀕し

真つ先に逃げ出した

役立たずでいながら高給を食む

原子力安全委員会委員長

族議員たち 御用学者たち

欠陥原子炉と 欠陥発電所の設計者 建設業者

電気機器等いつさいの設備製造会社と その施工業者

地元の誘致派に至るまで

儲けた人は数多く

利権の金の水脈 たふたふと流れ ゆきわたり……

高濃度放射能は 彼らには降りかからない

罪なき人々の上に降る

乳幼児の上に降る

胎児らにもしみとおる

無心の家畜にも降る



花と鳥と虫たちにも降りかかる

大地に降る

大自然に漂う

海水に混じる

生きとし生けるものを汚染する

生活を奪い

人生を奪う

それでいて 誰ひとり責任をとる兆しもない
この憤りをどこへ向けるか

まいにち

水を飲む

呼吸する

食事する

そして確実に蝕まれる わたしたちの
いのち

平成23年8月9日 柏崎市民である私

押見 操子

朝

目覚ましが鳴る。設定は4時40分。夫の携帯電話の目覚ましだ。

昨日、東京に行ってきたので、ちよつと疲れが残っている。夫が目覚ましを止めながら、「今日は、長崎に原爆が落とされた日だ。」とつぶやいた。「そうだね。」と、私は眼鏡を探しながら答えた。

仏壇の水を換えて、お花の水を換えて、お参りして、ふたたび散歩に出かける。今日は、海岸コース。ペットボトル、缶、タバコの箱や吸殻、花火の遊んだあと、ちよつとした飲食のからなど、あ

くまでも散歩のついでに拾う。ゴミが大漁。大漁(変換ミスではない)。しゃべりながら、大体6時ごろには家に帰り着いた。

水をまき、猫の散歩をし、お風呂に入り、食事をする。洗濯をし、ぬれたものを干し、すべて夫との共同作業。夫は仕事に出かけた。今日、年次休暇を取った。お盆の準備が、主な目的である。

柏崎のお盆は、花市が11日、お迎えが13日、14日、15日と親類がお参りにきて(行くほうは夫に任せてある)、16日に仏様を立たせる。お盆は、重要な行事で、13日から仏様のいる間は、お精進である。

なにせ、日ごろ不精ものを決めて込んでいるので、掃除が行き届いていない。節約働きで、年々「来年こそは、こんなことにならないようにしなければ」と思うのだが、今年もこのありさま。

午前中から気温33度のなか、押入れにいろいろなものを詰め込む。去年はなかなか見つからなかった仏様のお盆食器は、順調に見つかり、ほつとする。狭い家の中なのに。

「あ——、お客座布団の上に、猫が吐いている！」

買い物

10時半には、もう掃除に飽きてしまつて、とりあえず、買物に行くことにする。

フルーツ盛が980円は安い。親類の人からもらった手作りのエコバッグをもつて、「ホンジエ」に行く。

ホンジエは、柏崎の本町通にある第三セクターの商業施設で、いつも利用している。平日の午前中に来ることは、久しくなかった。

3階建てで、地下一階にスーパーマーケットが入っている。そこに行くことが主な目的だ。にもかかわらず、2階にいくエスカレーターに乗ってしまった。まあいいか。2階には、たしか、原子力発

電所の広報関係の部屋があつたはずだ。ついで行つてみよう。

商業施設なので、本来なら、お店が入つていて当たり前だ。しかしゲームセンターの隣に、経済産業庁柏崎刈羽地域担当官事務所が入っている。休日はやっていないという認識なので、行ったことはなかった。今日は勇気を出して、行つてみることにする。

部屋のドアは開いていた。でも、暗かった。節電対応なのだろう。部屋の前にも机が出ていて、「ご自由にお取りください」と、いろいろな小冊子が置いてあつた。4、5種類とつて、中に入る。中は、二つの部屋に区切られていて、入つてすぐの部屋は誰もおらず、左側には冊子が並んだ棚、右側は仕

切りでポスターが張つてある。

ポスターは、「原子力のごみの処理は、待たなしの状態だ」というもの。正面は次の部屋。部屋の中には机が島状になっていて、上に小冊子が「ご自由にお取りください」と置いてある。棚も、「ご自由に、お取りください」と「ご自由にご覧ください」だ。

片っ端から資料をいただく。エコバッグは、どんどん重くなる。気配を察知して、クールビズの格好をした、30代だろうか、男性がやってきて、「電気をつけましようか。」といった。柔らかな反応である。この人は、国家公務員なんだろうなと思つた。「いえ、結構です。」と言つた。「ここつて、来たことが なかったんですけど、

2、3年前からここでしたっけ」と聞く。「いえ、平成15年くらいですから、もう7、8年ですね。」と彼は答えた。不勉強が、恥ずかしくて早々に退散した。あとで考えると、それも変である。

エスカレーターで地下の食品売り場に向かう。お盆用果物籠、粉菓子セットを籠に入れる。敷すだれはない。小松菜が安い。地物のお刺身は、まだ作られていない。じゃあ、特売の豚肉を買おう。

あ、パイナップルが安い。それから、特売のところけるチーズなど。ポイント3倍デーなのがある。エコバッグは、エネルギー関係の資料満載になってしまったので、やっぱりスーパースーツを買った。

エスカレーターを使う手前で考

えた。やっぱり、2階に戻って、エネルギーのこと、原子力発電所のことを、あの男の人に聞こうかと。「東日本大震災から、変わったのか、変わらないのか、どう思っているのか」——聞こうか聞くまいか、迷った。結局、聞かなかった。「まだ、確かなところが出ていないし、聞かれても困るだろう」と思った。それは、逃げではないか。確かに、それはある。

エレベーターに乗りながら、大型テレビで高校野球を見ている人々を眺める。子育てが一段落して、仕事をしていなかったときは、高校野球を見たものだ。今年は一試合も見えていない。

歩きながら

東日本大震災に続く、福島第一原子力発電所の事故で、首相は「原子力に頼らない社会を目指す」という方向性を打ち出した。首相なのに庶民の思うところを正直に言うてしまったように思う。石油資源のない国が、原子力発電へと進んできたのは、一方では無理もない。しかし、唯一の被爆国なのに、科学を過信したのではないか。

それも一理ある。

原子力立地の柏崎は、どうしたらいのだろう。情報開示がなされるのか。情報開示があってもそれを読みこなせなければ判断できない。専門家を信じていた。特に、私は原子力保安院を信じていた。ところが、独立性が怪しいし、「原子力発電を推進する経済産業省の

中にあるのだから、その意向に沿った動きをするのだ」と報道されている。

柏崎の生き方とそれは、どう整合性を取っていくのか。市民が判断すべきだと思っっているが、判断の根拠は、何なんだろう。情報はたくさんあって、人は信じたいものだけを信じてしまう。情報操作が行われる。政治の出番という。

政治家を信じるか信じないかという話なのか。社会生活をまっとうに送るためには、何だかそんなことでは、ダメな気がする。でも、「気がする」って、なんなのか。

夫が帰ってきて、昼ごはんになった。柏崎のコメはうまい。セシウムが見つかってしまったら、農家の方がたは不安だろうな、と思う。

午後

かたづけは遅々として進まない。メールを打ったり、ちょっと移動したり、何だか進んでいない。

でも、今日は夕方からは、次世代エネルギー講演会に行く予定になっている。

庭に出てみる。暑い。プランターにピーマンを植えているのだが、そこにたくさんゾウムシのような虫がついてしまった。ピーマンの汁を吸っているのだと思う。まずい。殺虫剤をすると、ピーマンを食べるときに不安だし。誰か野菜作りに詳しい人に聞いてみよう。とりあえず、水流で虫を飛ばした。たくさんもらってきた資料は、まだ手がついていない。

夕方

おにぎりを作って食べ、夫の分も作って、5時過ぎに出かける。まだ暑い。

柏崎商工会議所電気自動車研究会主催の次世代エネルギー講演会に行く。商工会議所の大会議室だ。まだ早かったので残暑見舞いを書きながら開会を待った。

西川商工会議所会頭が、「次世代エネルギー開発は、避けることができないし、柏崎でもやれる分野であり、これから発展する分野だ」と簡潔に述べた。集まった人たちは商工会議所のメンバーで、モノづくりをしている人たち、その代表取締役の方がたである。

講師は、筑波大学大学院の石田

政義氏で、システム情報工学研究科、構造エネルギー専攻。演題は「次世代エネルギーとビジネスチャンス」商工会議所が頼んだ演題らしい。燃料電池や水素エネルギー利用の専門家である。バリバリ理系。わかるだろうかと不安がよぎる。しかし、パワーポイントが印刷して配られていたので心強い。

省エネ、二酸化炭素の削減、経済成長を同時に行うことを目指して、経済産業省は次世代エネルギーシステム、スマートグリッドを提唱した。次世代エネルギー社会システムのことで、もはや、実証事業も行なっている。北九州市、豊田市、横浜市、けいはんな学研都市、六ヶ所村（農村型）、宮古島（離島型）である。次世代エネ

ルギーシステム、スマートグリッドは次世代送電網のことで、再生可能エネルギー源の大規模導入をしながらエネルギーの供給側と受給側の相互連携をし、エネルギー供給を平準化して、二酸化炭素排出を抑制し、便利に暮らすというもの。情報産業が手を挙げて受注するイメージ。それが大型化すると、スマートコミュニティといつて、交通網もかわる。

さて、今の電力供給は、位置的には分散しているけれど、東北電力とか、関西電力とか、中央給電指令所を中心とした階級システムで中央集権的。再生可能エネルギー、例えば、太陽光発電は、何処でも電気が作れる、分散型電源。燃料電池はどこでも置ける分散

型電源。これを使ってエネルギーの地方分権といったようなシステムを作るというイメージ。

もちろん、一つだけでは安定性を欠くので、従来の発電との組み合わせ、分散型電源同士の組み合わせをうまくやらないとできない。

だいたい、二酸化炭素排出削減のためには、どうしたらよいか。大量に電力を使って、経済成長をしてきた。電力を使うと、石炭・石油が燃やされるので、二酸化炭素が出るわけだ。それが出ない。「原子力発電の増設」という方針で政府は広報活動など言ってきたが、これが東日本大震災後「脱原発」と方向転換した。そうなるかどうか、分散型電源が主流となるのだが、分散型電源は安定供給を

するためにはうまく組み合わせるのが至難の業。そして、いまの供給がとも安定しているシステムを組み替えなければならず、使う方に、我慢が必要になる。

石田先生は、今までのやり方が行き詰まっていると考え、水素エネルギーと直流連系をつかったエネルギーのネットワーク化を主張する。既存の技術を大規模に組み替えることになる。

講師の話は理解できない部分もあったが、たいへん興味深かった。特に「大規模に二酸化炭素の削減をするためにはこのようである」といった一般に言われていることに対する痛快なほどの反論が的を射ていて、その通りだと思わざるを得ない。

新エネルギーは、化石燃料に比べて安定的だし、コンパクトだし、勝てない。効率も、経済性も、勝てない。今やっている簡単な大規模集中型エネルギー供給システムを、新エネルギーの小規模分散型エネルギー供給システムへ変換するのは、大変手間がかかるし、ベストバランスがむずかしい。「それでもやる」というのなら、不便でも、高くても、受け入れる覚悟をしなくてはいい。持続可能社会に向けて、最終的には、ひとりひとりの心がけが、それも、日頃の心がけが重要だとする。現状を文明の危機として考え、科学者の責務は何かということが根底にある。

地域、地元企業にもアドバイスがあった。目新しいことではない。

自立と自信ということだと思った。結構興奮して、大股で歩いて、うちへ帰った。夫に上手に伝えられないのがもどかしい。すっきりしたものは何もないのだ、システム開発だってもがき苦しんでいるのだ。それでも、変わろうとしている。「原子力発電所に依存してぬくぬく暮らしている」と批判されがちな柏崎でも。

夜

枝豆を食べながら、ビールを飲んだ。直に寝てしまうのに、体重が増えるのが必至だとわかつているのに。明日体重計に乗るのが怖い。「なにを脳天気」猫が「自分にも分け前をよこせ」と、ならんだ。

(2011年8月10日)

空と大地を取り戻すまで

浦島 悦子

「普天間の空・大地は、わたしたちのもの！」風船行動

8月10日、宜野湾市の普天間基地周辺で、「普天間の空・普天間の大地は、わたしたちのもの！風船あげよう」行動が行われた。

1996年の普天間基地返還合意から15年経っても、まだ沖縄県民・宜野湾市民のもとに戻っていない普天間基地は、日常的に市民の頭上に爆音を轟かせ、命と生活を脅かしている。2004年8月13日、普天間基地所属の米軍ヘリが隣接する沖縄国際大学の校舎に激突・炎上した事件は、未だ記憶

になまなましい。

2012年には垂直離着陸輸送機MV22オスプレイが普天間基地に配備されることを、(米軍は以前から明らかにしていたにもかかわらず)これまでひた隠しにしてきた日本政府が、6月6日、沖縄側に正式に伝えた。

オスプレイは、開発過程で墜落を繰り返し、30人以上が死亡したため「空飛ぶ棺桶」「未亡人製造機」と酷評される悪名高い欠陥機だ。こんなものが沖縄の空を飛び回ることを考えるだけで恐ろしい。

「わたしたちの命を危険にさらすな！」「この空や大地は、わたし

たちのものだ！」「基地は県外へ！」

を意思表示するために風船をあげようという、(カマドウ小たちの集い)(宜野湾市周辺の女性たちのグループ)の呼びかけに、私たち(ヘリ基地にいない二見以北十区の会)は、普天間基地の移設先とされる名護市東海岸の住民として、「名護にも普天間にも、基地はいらない」ことを示す共同行動として取り組んだ。普天間爆音訴訟団もこれに賛同し、沖縄平和市民連絡会のメンバーらも参加した。

午前9時から午後3時まで、市内9か所(公園などの公共用地5か所、個人宅4か所)からあげら

れた色とりどりの風船が、青い空と台風一過の緑に映えて美しい。「基地さえなければ、宜野湾は、ほんとうに美しい町なの……」と、カマドウのメンバーが慨嘆するようにつづった。

私たちが風船をあげた場所は、普天間基地を一望に見下ろす嘉数高台公園の展望台。風船行動のあいだ、米軍がへりを飛ばすことができなかったのは大きな成果だったが、しかし、KC130空中給油機は、風船の間を縫うように低空でのタッチ・アンド・ゴーを繰り返して、爆音を撒き散らしていた。

沖縄県警や宜野湾市の公園管理課の職員が「危険なので（風船を）

降ろしてください」と、何度もやって来た。「危険なのは風船ではなく、米軍機です。飛行機を飛ばさないよう、米軍に言ってください。こんなに密集した住宅地の上を飛ぶのは航空法違反、国際法違反です」と、みんなで反論すると、宜野湾市の職員は「皆さんと気持ちは一緒です。でも職務なので……」と声を落とした。

安里猛市長を先頭に、宜野湾市は「普天間基地の一日も早い返還」を要求しているけれど、少数与党のため、このような行動を表だつて支持できない事情があるのだらう。

以下は、この風船行動に先だつて行われた記者会見の際に、私たち十区の会が出した声明文である。

普天間の空・大地を取り戻す行動に

名護市民として参加します

私たち「へり基地いらない二見以北十区の会」は、日米両政府が普天間飛行場代替施設Ⅱ辺野古新基地の建設を計画している名護市東海岸・二見以北十区の住民で構成する住民団体です。1997年10月に結成以来14年間、地域と子どもたちの未来を奪う基地建設に地元住民として反対の活動を続けてきました。

97年12月に行われた名護市民投票で、私たちは、日本政府による権力と金力を使ったあらゆる妨害・圧力をはねのけて「基地ノー」の市民意思を内外に発信しました。

そのときに、私たち名護市民・地域住民を支えてくれたのが、「カマドゥ小たちの集い」の、勇気ある行動でした。

彼女たちは、「戦後この方、自分たちが受け続けてきた耐え難いほどの爆音・騒音や、墜落などの事件・事故の恐怖を、同じ沖縄の名護市民に味わってほしくない」という一心で、名護に駆けつけてくれました。「カマドゥ」の女性たちと「十区の会」の女性たちがペアになって市内各戸を訪ね、普天間基地の危険性を体験者として伝え、「反対してください」と訴えた行動は、名護市民投票を勝利に導く大きな力になったと私たちは確信しています。

「名護に移設して自分たちの苦

しみを終わらせよう」というのではなく、「狭い沖縄のどこに移しても同じ」という彼女たちの思いは、多くの人がびとの心を揺り動かし、その後の沖縄の方向性をも示す、先駆的なものだったと思います。

——この14年間、時には絶望しそうになりながらも反対の灯をともし続けてきた地域住民・市民の願いが、ついに基地建設反対を明確に打ち出す名護市政を誕生させ、圧倒的な県民世論によって沖縄県政も「県外移設」へと舵を切り、辺野古移設＝県内移設反対が、全県民の意思として表明されるに至りました。

ところが日本政府は、「辺野古移設ができないなら、普天間基地は固定化される」と、自分たちが

「普天間基地返還」を約束しておきながら、「それができないのは沖縄県民のせいだ」という責任転嫁、脅しをかけてきています。

私たちは移設先とされた名護市民・地域住民として、これに厳しく抗議し、日米両政府が、約束の期限をとつくに過ぎた普天間基地を、宜野湾市民・住民に即刻返還するよう求めます。

私たち十区の会は、「普天間の空・大地はわたしたちのもの」「基地は県外へ」という「カマドゥ小たちの集い」の意思表示を支持し、次世代の子どもたちを守るための風船行動をともに行うことを表明します。

2011年8月8日

ヘリ基地いらない＝見以北十区の会

「2プラス2合意」は、無意味

6月21日、米国ワシントンで行われた日米安全保障協議委員会(2プラス2。日本から、北沢俊美防衛大臣、松本剛明外務大臣、アメリカから、ゲーツ国防長官、クリントン国務長官が出席)で、2014年までの移設期限を撤回し、「できる限り早い時期に」普天間飛行場の代替施設として、名護市辺野古崎に1800メートルの2本の滑走路を、V字形に建設することが合意された。

「最低でも県外(移設)」を公約にして政権交代した民主党政権が、打倒の対象であった自民党案にまると回帰したことに、沖縄県民は怒りを通り越してあきれ果てて

いる。

仲井真弘多県知事は、「辺野古移設は不可能」と断言し、稲嶺進名護市長は「(合意は)無意味」と、切り捨てた。

今や「県内移設反対」は、自民党県連まで含めた全沖縄の県民意思となっている。

米国議会においても強い懐疑論が出ている「辺野古移設」を、退任寸前の米国防長官、退任表明した菅政権の閣僚が、沖縄県民の意思を無視して「合意」した茶番劇は、県民のみならず、世界の冷笑的でしかない。

「2プラス2合意」には、「(建設に遅れが出ない範囲で)微修正も考慮し得る」と明記された。

昨年、県知事選以前まで容認派

だった仲井真知事は、島袋吉和・

前名護市長の「(環境アセスをやりなおさなくてよい範囲内での)沖合移動」に同調していた。その足もとを見て、「微修正すれば、知事が受け入れる可能性がある」と踏んだのだろうか。知事も見くびられたものだ。

もう一つ、沖縄にとって見逃せないのは、「日米同盟の深化」に向けて「地域の人道支援・災害救援分野の後方支援の拠点を沖縄に設置する」とされ、その場所として宮古島市の下地島空港が想定されていることだ。

地元では「災害救援に名を借りた軍事訓練だ」と、防衛省が打ち出している南西諸島への自衛隊配備とも絡めて警戒を強めている。

オスプレイパッド反対を 県民運動に

7月31日には、東村高江公民館で、「高江オスプレイパッド建設反対集会」が開催された。〈辺野古新基地と一体の計画〉と言われる高江ヘリパッドは、オスプレイの訓練のためのものだ、住民側はこれまでずっと指摘してきたが、日本政府の「正式伝達」を受けて、これまでの「ヘリパッド」を「オスプレイパッド」と呼び代え、改めて、建設反対を県民運動として取り組もうと、高江住民の会が呼びかけたもの。

緊急の取り組みにもかかわらず、地元住民をはじめ、全島から、約2000人が参加した。

〈住民の会〉を代表して挨拶した伊佐真次さんは「沖縄防衛局は（国の特別天然記念物・ノグチゲラの営巣期の終わる）7月から工事を再開する」と公言していたが、1か月間動けない状況だ。6月15日、工事再開に向けて重機を搬入しようとしたが、緊急連絡で70人が集まり、村内にも入れさせなかった。以来、私たちの力で阻止していることを確認し、工事を断念させるまで頑張ろう」と語った。

住民・支援者による24時間体制の監視座り込みと、全県・全国に広がった支援の取り組みの成果だが、県議会における与野党全会派一致の反対決議をはじめ、オスプレイ配備に猛反発する県内の動きが防衛局に工事の強行をためらわ

せている側面もある。

これまで、普天間基地の県外移設を明言しながらも「高江ヘリパッド」は容認してきた仲井真県政が、オスプレイ配備を機に方針を変える可能性を示唆しており、今後、オスプレイパッド反対の県民世論が大きく盛り上がっていくだろう。

8月23～25日には那覇地裁で、高江住民を国が「通行妨害」で訴えた「高江スラップ訴訟（権力を利用した嫌がらせ訴訟）」の集中審理が開かれ、国側証人、住民側証人への尋問が行われた。手弁当で奮闘する31人もの弁護団は「必ず勝利する」と意気軒昂だ。

（ヘリ基地いらない

二見以北十区の会 共同代表）

福島県男女共生センター「女と男の未来館」を訪ねて

斎藤 千代
三船 照子

福島県男女共生センター「女と男の未来館」は、男女共同参画の活動拠点として、二〇〇一年一月にオープンし、初代館長・下村満子さんが、「性別にかかわらず一人ひとりの生き方を考える場所」として心を込めて作り上げてきた施設ですが、東日本大震災で避難者の支援施設となったと聞き、八月十一日、〈あごら〉の斎藤千代と三船照子が訪問。同館の中野副館長、佐藤企画調査課長に、お話を伺いました。

三月十一日からずっと、大変でしたでしょう。この会館も、一近所の方の避難所になったのですか。

センター周辺は、地震の被害は、あまりなかったんです。この建物も、大きな被害はなくて、調理室の皿が壊れる程度の最小限の被害ですみました。

震災直後の被災者支援の対応としては、福島第一原子力発電所の近くにある双葉厚生病院の患者さんの一時的な避難場所として、一階の研修ホールを利用していただきました。五月下旬

からは、警戒区域から全町避難している、浪江町役場が入っています。

浪江町からここまで、車で何十分くらいかかるのでしょうか。

間に阿武隈高地がありますから、一時間から一時間半は、かかります。山を抜けて浪江町なり、双葉町なり、南相馬市に行きますので、けっこう時間がかかります。

最初は、病院に入院されている方たちを緊急に受け入れられたとか……。

はい。震災の翌日、県の災害対策本部から「双葉厚生病院の患者さんや病院関係者を緊急に避難させるために、研修ホールを使わせて欲しい」という要請がありました。「一時避難場所」ということで、入院患者・病院関係者など、約百名の方がたを受け入れました。そのほか、福祉施設関係の方がたも入ったりしていましたが、一週間ほどで避難者の方がたは、いろんな医療機関や福祉施設等に、三々五々移動して行かれました。

被曝状況の検査会場にもなったとか……。

はい。三月十三日から当センターは被曝スクリーニングの会場になりました。十二日に双葉

厚生病院の方がたを受け入れた際、「衣服や身体に放射性物質が付着している方がいるかもしれない」ということで、災害対策本部から外部被曝の有無を測定する検査員が来て、スクリーニングを行いました。そうした経緯から、翌日、常設のスクリーニング会場になることが決まり、また、駐車場に自衛隊による除染施設が設置されました。

県内には十箇所ほどスクリーニング会場があったのですが、除染施設まで備えた会場は少なかったため、四月十日に閉鎖されるまで、多くの避難者の方がたや近隣住民の皆さんが来館されました。

県内では、トータルで十数万の方がスクリーニングを受けているのですが、除染の対象になったのは百数名です。「一定の数値を超えると除染をする」ということで、一般の住民の方は、わずかです。原発周辺で活動しておられた自衛隊、警察、消防の方が多かったです。

その間は、ここでの一般的な講座などの実施は？

スクリーニング会場は一階の研修ホールだけでしたが、館内の安全性が確保できるのか、わからなかったため、一般の施設営業は、約一か月間ストップしました。

今は放射能の知識も、かなり一般化していますが、当時は私たちもよく分からなかったので、センターとしての通常の活動は休止し、スクリーニング会場専用として運営されていました。

市民で、ここに避難した方は、いらっしやらなかったんですか。

二本松市でも、地震で避難された方はいましたが、市民のための避難所は、市で、用意していました。そこに、しばらく避難していた人がいた、と聞いています。

下村さんは、「この建物は、安全性に特に考慮して造った建物だ」とおっしゃっていましたが。

そうですね。県の公共施設をみると、かなり被害の大きいところがあります。福島市にある県立図書館や県文化センターなどは、かなり被害を受けています。

また、郡山市にあるビッグバレットふくしま（複合コンベンション施設）は、県内最大の避難所として、ピーク時で約二千五百人が避難していましたが、3階、4階あたりは、窓や天井がかなりやられています。

当センターとはほぼ同じ頃に建てられた施設ですが、ひねりが加わったためか、建物の損傷が大きかったようです。単に建築年数だけではなく、地盤や建物の構造、どういう圧力が加わったかによって、建物の損害が違ったようですね。

「これから改修」という施設も多いのですが、当センターは被害がほとんどなかったことから、スクリーニング施設としての役割を四月十日に終えたあと、十二日からは通常の営業を再開することができました。

その後、五月二三日から、一階の研修ホールに浪江町の役場機能が入っています。二本松市やその周辺は浪江町からの避難者の方が多いので、役場機能を二本松市に置いているんです。ここに来る前は二本松市東和支所（旧東和町役場）にあったのですが、多くの町民の皆さんが市内の仮設住宅に住んだり、岳温泉のホテルに二次避難をされているため、「中心部のほうが便利だ」ということで、センターに移って来られました。

特にお困りになったこととか、おありでしたか？ この職員は大勢いらっしゃるわけではないので、大変でしたでしょう。

当初困ったのは、職員の車のガソリンですね。列車も止まっていますから、バスしかない。郡山からはバスもない。ですから通勤手段をどうするかです。乗り合わせて来たりとか……。

それは大変でしたね。職員がここにお泊まりになることは、なかったのですか？

双葉厚生病院の方がいらっしゃった時期ですけど、何かあると困るので、事務室も夜通し誰かはいないといけないということで、職員が輪番で泊まったりしていました。その時期は、スクリーニングを二十四時間体制でやっていて、自衛隊の方なども入っていました。

お疲れになったでしょうね。ボランティアの方は、たくさんいらしたのですか。

震災支援ボランティアということではありませんが、もともと、このセンターに登録されているボランティアの方が、たくさんいらつしやいます。

避難所から仮設住宅に移る際に生活用品が必要になるので、ボランティアの皆さんが、浪江町役場に來られる町民の方がたのために、食器などの生活用品を自宅から持ってきたり、全国の知人から送ってもらったりして集め、きれいにラッピングして役場の入口脇に「自由にお持ちください」と、並べて提供するなどの支援活動をしています。

心のこもる対応をなさったのですね、それにしても、福島は、津波の被害と原発事故の被害の両方を受けて、大変でしたね。

地震と津波の被害で見れば、岩手県や宮城県が大きいと思いますが、本県はこれらに加え、放射線の関係で、がれきの処理も進まないという状況があります。他県では、がれきが大いぶ片付いてきているようですが、福島県の浜通りはまだ手がつけられず、復旧・復興が遅れざるをえない、そういう特殊な状況があります。

宮城県南の白石市や丸森町では、「夏休み中に」ということで、幼稚園の除染をしていますね。

県内でもいろいろ動きがあります。

伊達市などは単独で除染を始めています。他の地域でも各町内会ぐるみで、地域ごとに取り組みが始まっていて、どこでも本格化してきていますね。「閾値」がないので、「子どものためにはとにかく線量を下げる、減らすことが大事だ」と。

校庭でも、表面の土を削れば、線量が大幅に低減するので、線量の高いところから表土の入れ替えが進められています。幼稚園・小学校など、線量の高いところは既に実施したところが多いと思います。高校なども「夏休み中に」ということで進められています。

放射線について、いま小さいお子さんをお持ちのお母さん方の心配は、大変ですね。

人によって違いはありますが、小さいお子さんのいる親御さんは、かなり心配されています。転校とか引越しをする人も、少なくありません。

このあたりでも？

そうですね。「一万人に対して五人くらいの割合で発ガンのリスクが高まる」という話を聞くと、「うちの子どもがその五人に入るかもしれないから引越そう」と考える方もいらっしゃる。その人その人のリスクに対する判断なので……。難しいところですね。

目に見えて分かるものではないだけに、風評被害も多いようで、大変ですね。

低線量の被曝リスクについては、その影響が今のところ科学的に分かっていないことが多いようです。

結局、広島とか長崎とか、チェルノブイリなどのデータしかないし、今後、福島三十年後、五十年後がどうなるかは、まだ分かっていないところが多いので、放射線に対する不安があるということだと思います。

今回の、原子力発電所の事故の影響が、どこまで続くのか、はつきりしたことがわからないので、そういう不安は、お子さんをお持ちの女性の方は、当然あると思いますね。

いつ戻れるのかわからないから生活設計も立てられない。そういう迷いがあります。

私どものセンターでも、「女性と子どものための放射線と健康」というテーマで講座を予定しており、放射線医学総合研究所の先生(女性)に講師をお願いしているところです。

「女性のためのセンター」が、「地域のためのセンター」としても大活躍をなさった。このセンターは、たしか、創立十周年でしたね。

今年の一月で満十年でしたから、今年は十一年目になります。一月まで十周年企画をずっとやってきて、それが終わって間もなく、今回の震災が起きました。

センターのボランティアの人たちも、「十年を振り返りましょう」ということで、一月に交流会をやつて、「今年度はまた新しいことをやりましょう」と話している矢先の震災でしたから、ちよつと出鼻をくじかれた感じがありました。

「ビッグバレットふくしま避難所で、女性専用スペースの運営に関わられた」と聞きました。

「避難所の中に女性の着替え場所がない」などの問題が生じており、県からビッグバレットふくしまに派遣されていた支援チームの責任者の方から、「女性専用の部屋をつくつたので運営に力を貸して欲しい」と協力依頼があつたので、センターでも応援に入りました。

スペースの運営の主体は、地元である郡山市で活動している「郡山市婦人団体協議会」「女性の自立を応援する会」「しんぐるまざあず・ふぉーらむ福島」という、三つの女性団体が担い、曜日ごとにローテーションを組んで常駐しています。センターは、そのコーディネートや関係機関との調整などの役割を担っています。

授乳するにしても「男性がいる前では授乳ができない」とか、女性の下着にしても、男性スタッフでは細かい配慮が行き届かない。そんなところに女性に関わることで、さまざまなニーズに対応することができる。

例えば、二千人いる避難所に数百個しかないものでも、本当に必要とするものであれば、女性専用スペースで配つたりともしました。役所的には、「全部同じにしないと不公平になる」

ということがありますが、女性専用スペースでは、わりと臨機応変なかたちで運用ができました。ここがあるので、避難している女性にも、少しホッとしていただいているのではないかと思います。

三団体が中心になって運営し、センターがバックアップする形で関わっていたため、それぞれの団体に主体的に活動していただくことができました。

それぞれの団体によって、色彩も違うし、やっていることも違うし、年齢層も違う。そういう意味でバランスが取れていて、よかったと思います。

それこそ県の女性センターの本領発揮で、地域の方がたも、さぞお喜びになったことでしょうね。

いろんなところで「女性専用スペース」の活動が取り上げられ、日本学会議の、災害・復興と男女共同参画「六・一一シンポジウム」でも、郡山市婦人団体協議会の小林清美会長さんが女性専用スペースのことを報告したりしておられます。

そういうことで、このすばらしい施設が、もっと一般の方がたにも知られ、「宿泊しながら、女性問題や女性学を勉強しよう」という方が増えれば、いいですね。

それにしても、こういう地味なお仕事を持続なさるのは、大変ですね。

どうぞ皆様、おからだをお大切に、一層のご発展をお祈りします。ありがとうございました。

一人ひとりの、あのとき、を、あらためて追ひ、語り合い、今とこれから、の暮らしを探ろうとしている。

福島県に隣接する丸森町や白石市の友人は、通学路の除染や地域住民の健康調査などを行なっています。

菅政権（こう呼ぶのもあと数日）は、「放射線量の高い原発周辺の地域の住民の居住を長期に禁止する。土地は国が借り上げる方向で検討に入った」と。

新政権の大臣を選ぶ基準の一つ、「沿岸被災地に滞在して、何をしましたか？」というのは、いかがでしょうか。

（船）

◆福島原発事故から、もうすぐ半年。あの日に、すべてがガラリと変わったハズ……なのに、街ゆく人の表情に、それは読み取れない。無関心は、もうやめよう！ 覚悟すること。すべての国民が手をつなぎ、声をあげ、行動

することで、脱原発社会の実現は初めて可能。

山も川も、大地も、水も食料も、すべてが放射性物質に汚染された中で、人びとの幸せはあるだろうか。

次の原発事故は、もうアウト！

私が今まで実行したこと。

デモに参加。各電力会社、経産省、原発立地県・市・町に抗議の電話やFAX。脱原発表明の議員にエールを送る。被災地にカンパする。

ひとりにできることは、これくらい。でも、一億人が声を上げれば、ごう音

に。行動すれば、大地をゆるがす力となる。

7月27日衆議院厚生労働委員会では、政府の除染対策を批判し、「満身の怒りを表明された児玉龍彦東大教授。政府はようやく重い腰をあげ「除染

に関する緊急実施基本方針」として、国の責任を明確化することに。

児玉教授の姿に感動するならば、氏にない、共に生きようではないか。（綿）

◆「大変なことほど、その時には大事件とは思われない」と言われますが、今度の「事故」も、その「大変さ」が、時間を経て、ようやく一般に認識され始めたような感じがします。

「事故」にしろ、「事変」にせよ、「無事でないこと」が起こったときは、必ず大きな「有事」がある……というのは、歴史が証明しているのでは、ないでしょうか。

評論はやめて、いま、この日本を、世界を、希望に満ちた場にするためには、「一人ひとりの私」の言動が要めでは、と思っています。

皆様のご意見を、どしどし送ってください。お待ちしています。（千）

へあごらは、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……

心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。

どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

へBOCへの登録もどつぞ……

一九六〇年に生まれたへBOC＝バンク・オブ・クリエイティビティは、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上へあごら会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com #たてboc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 330号 東日本大震災に想うⅡ ―原発はいらない―

●編集 あごら新宿 ●発行 2011年8月20日 ●印刷 藤田印刷(株)

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,000円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部



9784893061874



1920036010004

ISBN978-4-89306-187-4

C0036 ¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

平和と平等を追求する 『あこら』近刊シリーズ

新政権に望む

六〇代は女ざかり

「女の年金」を考える

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団

BOC

◆◆◆◆◆
各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

◆◆◆◆◆
男女共同参画の
BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 FAX3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

サイレントマイノリティの**BOC**出版